亀岡市文化財調査報告書第 95 集

市内遺跡発掘調査報告書

国営緊急農地再編整備事業「亀岡中部地区」関係遺跡発掘調査
－千代川遺跡第 30 次・東加舎遺跡第 3 次・西加舎遺跡第 4 次（平成 28 年度）－
－井手遺跡第 4 次（平成 29 年度）－

亀山城跡第 7 次発掘調査

千代川遺跡第 32 次発掘調査

２０１８

亀岡市教育委員会

序

山陰道の東端に位置する亀岡市は、古来より畿内と山陰を結ぶ交通路の要衝として、様々な地域の影響を受ける中で、歴史、文化、風土が培われ、育まれ、ふるさと亀岡を形づくってきました。それらは自然豊かな亀岡の地に根差し、先人の知恵と工夫、祈りや願いがこめられた歴史的文化遺産であり、それらの保存継承、保存活用は、歴史と伝統に裏付けられた個性ある亀岡のまちづくり、ひとづくりの礎となるものです。

亀岡市では、地域資源、地域資産を活かしたまちづくり、人づくりの指針として『第４次亀岡市総合計画～夢ビジョン～』を策定し、「水・緑・文化が織りなす笑顔と共生のまち　かめおか～セーフコミュニティーの推進とにぎわいのまちづくり～」を基本理念として様々な施策を市民の皆様と協働で推進を図っているところです。また、亀岡市教育委員会においても、第４次総合計画に基づき、「ともに学び　ともに育ち　ともに生きる　かめおか教育の創造」を基本理念とし、「ほっかほか心　ふるさと大好き　かめおかっ子」を目指す子ども像とする『亀岡市教育基本計画』を策定し、様々な施策を進めています。

そのような中、わたしたちを取り巻く社会情勢の急激な変化や情報化社会の進展に伴う社会環境や都市構造の変化に伴い、先人から受け継いできた様々な文化や伝統、景観等といった郷土の誇りうる資産の変容や消滅が危惧される状況にあり、その保存継承、保存活用について市民の皆さんと協働で如何に取り組むかが大きな課題となっています。

私たちのふるさとの誇りである、脈々と受け継がれる文化、歴史、保津川と里山が織りなす豊かな自然、神秘的な朝霧など、ふるさと亀岡の魅力を磨き上げ、「選ばれるまち」・「住み続けたいまち」・新たな亀岡市の実現につなげていきたいと考えております。

本書は、文化庁から国宝重要文化財等保存整備費補助金を、京都府から文化財緊急保存費補助金の交付を受けて実施しました市内遺跡発掘調査事業の成果をまとめたものです。本書が地域の埋蔵文化財への関心と理解を深める上での教材として、御活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、調査に際しまして御協力、御指導をいただきました文化庁及び京都府教育委員会等関係機関、並びに土地所有者の方々をはじめ、地元住民の皆様に多大な御理解、御協力をいただきましたことに厚くお礼申し上げます。

ここに、発掘調査の成果を報告するとともに、関係各位のご理解に感謝し、合わせて今後のご協力をお願いする次第です。

平成 30 年 3 月

亀岡市教育委員会

教育長　**田　中　太　郎**

例　　言

1　本書は、文化庁から国宝重要文化財等保存整備費補助金を、京都府から文化財緊急保存費補助金の交付を受け、市内遺跡発掘調査事業として実施した発掘調査の報告書である。

2　本書に収めた調査対象遺跡は下記のとおりである。

調査対象遺跡	所在地	現地調査期間	調査面積	担当者
千代川遺跡（第 30 次）	亀岡市千代川町	2016.9 ～ 2017.1	420㎡	中澤　　勝
東加舎遺跡（第 3 次）	亀岡市本梅町	2017.2 ～ 2017.3	160㎡	中澤　　勝 飛鳥井　拓
西加舎遺跡（第 4 次）			18㎡	中澤　　勝
井手遺跡（第 4 次）		2017.11 ～ 2018.3	920㎡	飛鳥井　拓
丹波亀山城跡（第 7 次）	亀岡市京町	2017.5	8㎡	中澤　　勝 飛鳥井　拓
千代川遺跡（第 32 次）	亀岡市千代川町	2017.12	9㎡	中澤　　勝 飛鳥井　拓

3　井手遺跡（第 4 次）については、調査継続中であることから、その概要のみを記し、詳細については次年度に報告する。

4　本書の執筆は各担当者が行い、編集は各担当者が行ったものを飛鳥井がまとめた。

5　本書に掲載した地図は、注記のあるものを除き国土地理院発行の地図である。周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲は、京都府教育委員会発行の『京都府遺跡地図 〔第 3 版〕第 2 版』を基に作成した。

6　本書で使用する座標値は世界測地系の値である。

7　各遺跡のアルファベットの略記号は、以下のとおりである。

千代川遺跡：CW　　東加舎遺跡：HMKY
西加舎遺跡：HMNK　　井手遺跡：HMID
丹波亀山城跡：TKYJ

8　発掘調査組織は、下記のとおりである（平成 28 年度・29 年度）。

〈発掘調査組織〉

調査主体者	亀岡市教育委員会			
調査責任者	亀岡市教育委員会	教育長		田中　太郎
調査事務局	亀岡市教育委員会	教育部長		山本　善也
	同	社会教育課長		河原　正浩
	同	社会教育課文化財係	係長	土井　孝則
調査担当者	亀岡市教育委員会	社会教育課文化財係	主任	中澤　　勝
	同		主事	飛鳥井　拓
	同	文化財専門官		樋口　隆久
	同	文化財専門員		水谷　壽克

9　発掘調査に当たっては、京都府教育委員会より現地にてご指導をいただいた。

10　発掘調査の現地作業及び整理報告作業にあたっては、多数の方々の協力を得た。心より感謝したい。

〔千代川遺跡第30次発掘調査〕

（調査作業員）俣野　昭・俣野　千里・俣野　治城・俣野　真理子・八木　寛・梅本　三好・奥村　現人・河原　悟・谷田　幸泰・栃下　孝夫・千葉　直秋・仲井　忠次郎・中沢　泰男・永田　博・長谷川　隆・俣野　勘平・八木　清・山本　恵子

（調査整理員）村上　典子

〔東加舎遺跡第3次・西加舎遺跡第4次発掘調査〕

（調査作業員）竹岡　秀雄・竹岡　久・竹岡　賢治・奥村　昭・落田　毅・河本　隆一・森　利晴・小林　功・小林　久幸・森　雅男・森　久和・西村　航也・木村　義雄・森　金滋

（調査整理員）村上　典子

目　　次

1　国営緊急農地再編整備事業「亀岡中部地区」関係遺跡発掘調査報告書
・・・・・・・・・・　1
(1) 千代川遺跡第 30 次発掘調査（平成 28 年度）
(2) 東加舎遺跡第 3 次発掘調査（平成 28 年度）
(3) 西加舎遺跡第 4 次発掘調査（平成 28 年度）
(4) 井出遺跡第 4 次発掘調査（平成 29 年度）

2　亀山城跡第 7 次発掘調査報告書　・・・・・・・・・・

第 13 図　第 2 トレンチ北壁土層断面図　・・・

図版第 3　(1)　調査地北半部　溝跡全景（東から）
(2)　調査地北半部　溝跡全景（西から）
図版第 4　(1)　調査地南半部　全景（北から）
(2)　調査地南半部　全景（南から）
図版第 5　(1)　調査地南半部　溝跡全景（北から）
(2)　調査地南半部　溝跡全景（南から）
図版第 6　(1)　調査地南半部　溝跡土器出土状況
(2)　調査地南半部　溝跡土器出土状況
図版第 7　(1)　調査地南半部　中世素掘り溝検出状況
(2)　調査地南半部　柱穴群検出状況

(2) 東加舎遺跡第 3 次発掘調査
図版第 8　(1)　第 2 トレンチ　掘削状況（北西から）
(2)　第 2 トレンチ　柱穴跡検出状況（北から）
図版第 9　(1)　第 2 トレンチ　東側拡張部掘削状況（南東から）
(2)　第 2 トレンチ　掘立柱建物跡検出状況（南東から）
図版第 10　(1)　第 4 トレンチ　調査地掘削状況（北西から）
(2)　第 4 トレンチ　建物跡礎石検出状況（北から）
図版第 11　(1)　第 4 トレンチ　全景（南西から）
(2)　第 4 トレンチ　北側全景（南東から）
図版第 12　(1)　第 4 トレンチ　中央部礎石検出状況（南東から）
(2)　第 4 トレンチ　南側全景（南から）
図版第 13　(1)　第 4 トレンチ　SE401 検出状況（南から）
(2)　第 4 トレンチ　SD402 検出状況（北から）

(3) 西加舎遺跡第 4 次発掘調査
図版第 14　(1)　調査地 1
(2)　調査地 2
2　亀山城跡第 6 次発掘調査
図版第 15　(1)　調査地全景（北西から）
(2)　調査地掘削状況（南から）
図版第 16　(1)　調査地西壁断面
(2)　調査地東壁断面
3　千代川遺跡第 32 次発掘調査
図版第 17　(1)　調査地全景（西から）
(2)　調査地北壁断面

1　国営緊急農地再編整備事業「亀岡中部地区」関係遺跡発掘調査報告書

国営緊急農地再編整備事業「亀岡中部地区」の対象地区は、一級河川淀川水系桂川（大堰川）右岸の比較的緩やかな傾斜の農業地帯で、水稲を中心とした土地利用型農業が行われている。しかし、ほ場が狭小で不整形であるため、機械の大型化が困難であり、また灌漑方式が田越し灌漑であるため水利用の自由度がなく、一部のほ場では排水不良も生じており、効率的な農作業への支障となっていることから、今後、耕作放棄地が増加する恐れがある。このため、当該事業では区画整理を施行し、耕作放棄地を含め農地の土地利用を計画的に再編し、さらに担い手への農地の利用集積を進めることにより、生産性の向上と耕作放棄地の解消・発生防止による優良農地の確保を図ることを目的としている。

事業対象地は6工区にわたり､5工区において遺跡の広がりをみることができる。佐伯工区（稗田野町）に佐伯遺跡、曽我部工区（曽我部町）に穴太遺跡・犬飼遺跡・金生寺遺跡・與能遺跡・與能廃寺、本梅工区（本梅町）に井手遺跡・東加舎遺跡・西加舎遺跡、余部・安町工区（余部町・安町）に余部遺跡・加塚遺跡、千代川工区（千代川町）に千代川遺跡・丹波国府推定地・桑寺廃寺が広がる。特に千代川工区には弥生時代中期の拠点集落跡・寺院跡・官衙遺跡と大堰川右岸を代表する遺跡が所在する。

当該事業の実施と文化財の保護を円滑に図ることを目的とした遺跡の範囲確認調査を亀岡市教育委員会が平成24年度から実施し、同年度からは千代川工区及び余部・安町工区、同25年度からは本梅工区を対象として実施している。なお、当初、府営ほ場整備事業として計画された本梅工区では平成10年度・同11年度、曽我部工区は平成17年度から19年度の3箇年にわたって実施している。

このように、事業対象地では、多くの埋蔵文化財が調査対象となることが予想されたことから、近畿農政局、京都府、京都府教育委員会、亀岡市、亀岡市教育委員会の間で協議を重ねた。その結果、切土施工等によりやむを得ず影響を受ける部分については、記録保存を前提とした発掘調査を実施することで協議が整い、工事計画と調査成果に基づいて、同26年度から本発掘調査を実施している。

本報告書では、平成28年度に千代川町で実施した千代川遺跡、本梅町で実施した東加舎遺跡と西加舎遺跡、平成29年度に本梅町で実施した井出遺跡の調査成果について報告する。

(1) 千代川遺跡第 30 次発掘調査（平成 28 年度）

1　はじめに

千代川遺跡は、亀岡市千代川町の平地部一帯に広がり、遺跡を二分するかのように北西から南西方向に流れる千々川が形成する扇状地上に位置する。当遺跡は各種開発等に伴い、過去 28 次わたる発掘調査が実施され、縄文時代から鎌倉時代にわたって集落が連綿と営まれていることが明らかになっている。また、遺跡北半部には当市において最も早い時期に建立されたと考えられる桑寺廃寺、さらには現地形・現地割・小字名など、歴史地理的見地から丹波国府跡に推定され、京都縦貫自動車道に伴う発掘調査では、掘立柱建物跡とともに、多量の緑釉陶器や墨書土器、木簡などが出土している。しかし、これまでの調査では、国府の中枢域となる建物等の遺構は検出されておらず、丹波国府の解明には至っていない。

今回報告する第 30 次調査は千代川町千原清草地内において、次年度以降のほ場整備事業に伴う工事に先立ち、工事の切り土が遺構面まで達することが確実で、さらに工事実施まで耕作がない対象地について本発掘調査を実施した。現地調査は平成 28 年 9 月 9 日から行い、調査面積は約 420㎡である。調査終了後、平成 29 年 1 月 26 日に京都府教育委員会とともに、現地説明会を開催し、平成 29 年 1 月 31 日に埋め戻しを行い、調査を完了した。

調査にあたっては土地所有者の方々をはじめ、千代川国営ほ場整備推進協議会、千代川町自治会には多大な御協力、御理解をいただいた。心より感謝したい。

なお、第 29 次調査は京都府教育委員会によって、同西斉ノ本地内で実施されている。

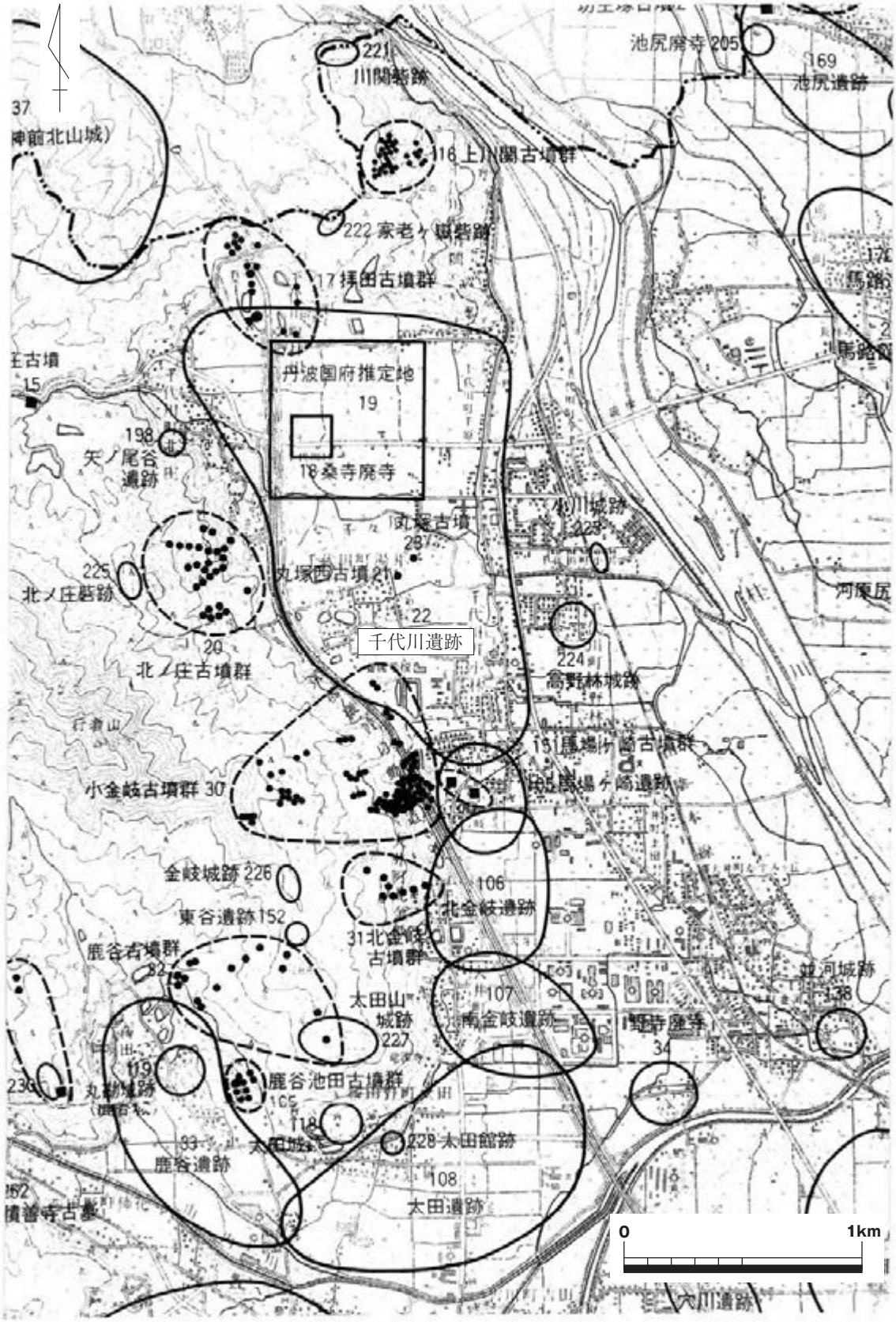
2　調査経過

千代川工区は概ね、千代川町を二分する千々川以北の同町北ノ庄・拝田・千原・川関区が対象であり、千代川遺跡の北半部が対象地にあたる。

千代川遺跡は、国営緊急農地再編整備事業「亀岡中部地区」に関係して、平成 24 年度に亀岡市教育委員会が範囲確認調査（26 次）を、また同 27 年度には京都府教育委員会が小規模な本発掘調査（第 28 次調査）を実施している。なお、第 28 次調査では本調査地の南東約 150m の地点で、須恵器杯 4・蓋 1、土師器杯 1・皿 1・椀 1 を意図的に並べて埋納した奈良時代中期の遺構が検出されている。

調査は耕作土及び掘削土の置き場の関係から、調査地を南北に分けて行い、北半部の調査を実施した後、完了後に埋め戻しを行い、耕作土を移動し、南半部において実施した。

調査は重機で耕作土を除去後、調査地全域において無遺物層と思われる黄褐色土となり、明確な遺構は検出されなかったが、北西部分において途中で不明瞭になる溝状の遺構が確認されたことから、サブトレンチにおいて人力で掘削を重ねた結果、調査地の東側約 3/2 は大きく盛土が行われ、現在の土地が形成されていることが確認された。このため、盛土を除去した結果、遺構を確認し得た。また、南半部についても同様の状況であった。



第１図　調査対象遺跡及び周辺主要遺跡分布図（1/25,000）

第２図　調査地位置図（亀岡市都市計画図　1/5,000）

3　調査概要

調査では、奈良時代後半から平安時代前半にかけての溝、鎌倉時代以降の素掘り溝・土坑、また、これらの時期にわたる柱穴を検出した。遺構の検出状況から、調査地の地形は、現状の耕作地への平坦化に際して大きな造作が行われたものと思われ、調査地西側約 1/3 は、遺構の遺存状況は悪く、大きく削平を受けている。これに対し、調査地東側約 2/3 は地山である黄褐色土等で整地され、現状の耕作地が形成されている。この状況から、かつては南北方向に細長い 2 枚の農地であったものと推測される。

平面図は、第 3 ～ 5 図に示すとおりである。

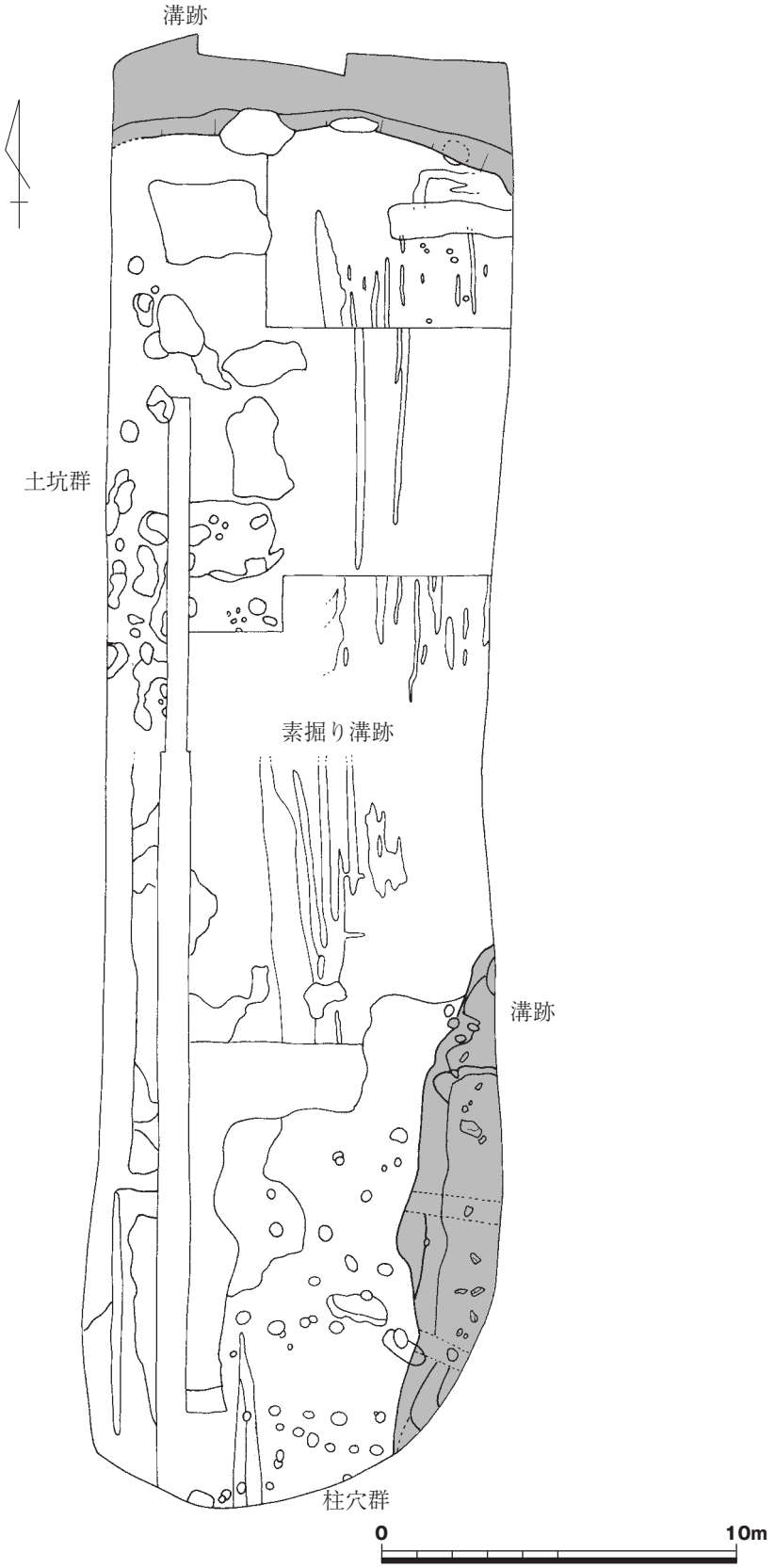
溝跡（奈良時代後半～平安時代前半）

調査地北端で東西方向の、また東端で南北方向の溝跡の一部を検出した。前者は約 11.5m にわたって延び、後者は約 14.5m にわたって延びる。また、両溝は一方の肩部のみを検出したのみで、全体の規模は不明であるが、断面形は逆台形で、幅は 3m 以上、深さ約 80cm と考えられる。
厚さ約 0.38m の整地土を除去した後、淡茶褐色土面で後述する素掘り溝を検出し、中世段階で耕作地として利用されていた。溝は上層から暗灰褐色土・暗茶褐色土・淡黒灰色土となり、最下層は黒褐色粘質土と堆積する。特に南北方向の溝跡では、下層の 2 層から多量の須恵器が出土し、その他、墨書土器「大宅」、黒色土器が出土した。また、淡黒灰色土では人頭大の礫がみられ、礫の下からも土器が出土した。調査地周辺は礫を含む土質ではないことから、溝内の礫は人為的に投棄された可能性が考えられる。

これに対し、東西方向の溝跡ではほとんど土器は出土していない。しかし、溝内には幅約 40cm、長さ約 80cm の巨石があり、周辺から多量の炭の広がりがみられた。これによって、火を伴う祭祀行為が行われた可能性がうかがえる。さらにこのように想定すると、この溝は日常的な排水機能を果たすものでなかったものと推測される。

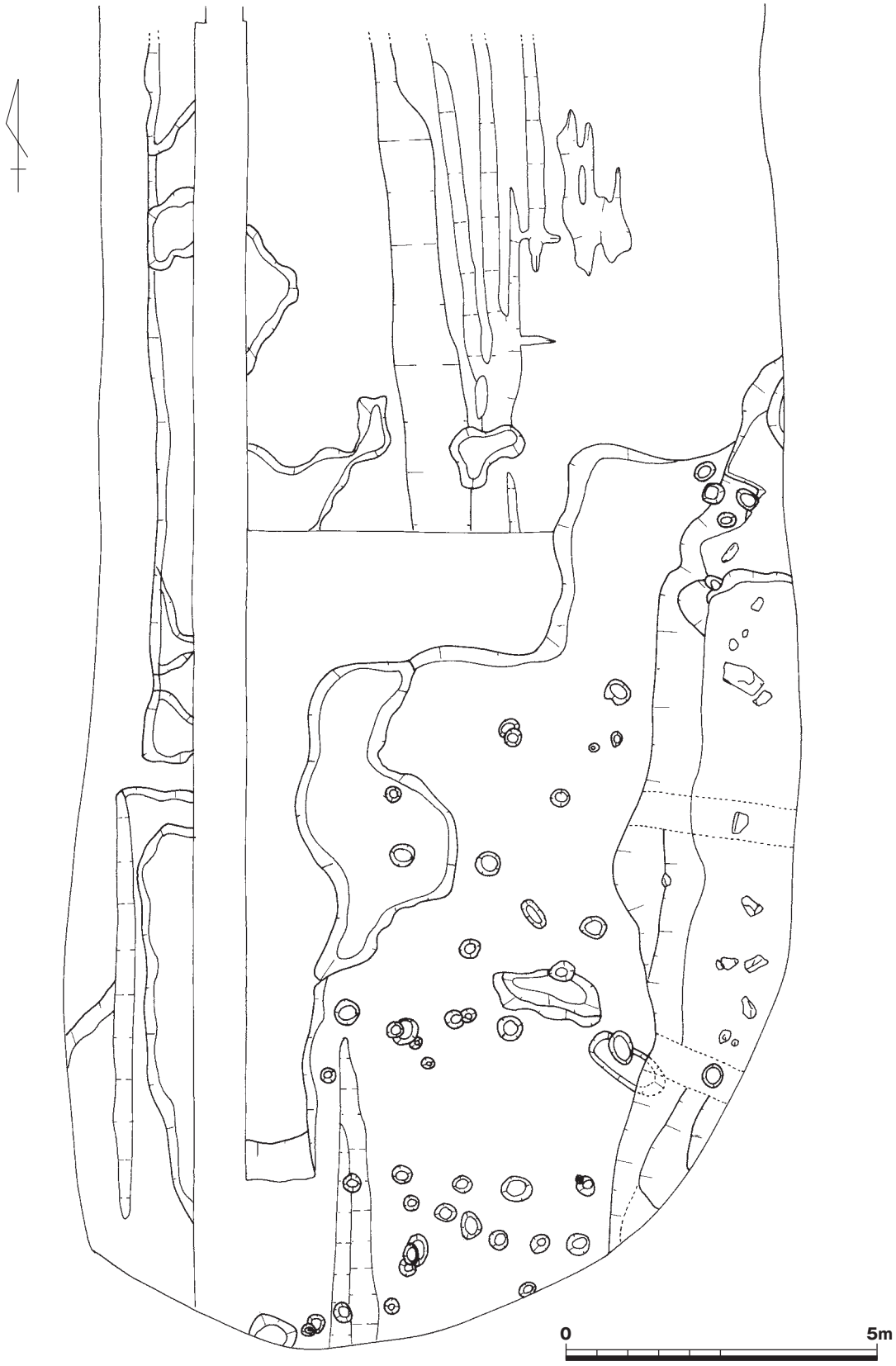
また、周辺の地形は北西から南東方向へと傾斜する。調査地の地形は北方から南方へ下がり、東方から西方へと大きく地形がさがる。このことから考えると、東西方向の溝は両肩部のレベルはほぼ同じで溝状の形状を示していたと考えられるが、南北方向のものは西肩部に比べ東肩部がかなり低く、溝状というよりも区画する施設状のものとも考えられ、前述の祭祀行為と合わせて、排水機能というよりも、区画機能を果たすものであったであろう。

2 条の溝の接続部は調査地外にあたることから、確認するには至らなかったが、東西方向の溝は調査地東端部でやや南方向に曲がる様相がみられること、また、規模・形状が同様であることからみて一連のものと想定される。両溝は L 字状に屈曲、あるいは T 字状に延びるものと思われる。このように、両溝は屈曲する一連のものと推測され、出土遺物から 8 世紀後半から 9 世紀前半に機能していたものと考えられる。



第３図　調査地平面図

第４図　調査地北側平面図



第５図　調査地南側平面図

柱穴群

柱穴は調査地南側 1/3 の部分に集中する。柱穴は平面が円形で、直径 20cm ～ 40cm である。埋土の違いから奈良時代～平安時代と鎌倉時代以降のものと 2 時期に大別できる。建物跡として復原することには至っていないが、検出地点と溝跡の土器が集中して出土している地点と一致している点で注目される。

素掘り溝群

調査地東側 2/3 において、整地土を除去した淡茶褐色土面で南北方向を中心とした素掘り溝群を検出した。素掘り溝は幅約 20cm ～ 40cm、深さ約 5cm ～ 15cm、断面 U 字形である。その埋土は淡灰色土で、土師器・瓦器等の細片が混じる。当地域では 12 世紀～ 13 世紀の建物群が廃棄されて以降、一帯は耕作地へと変化する。素掘り溝群は耕作の痕跡とされ、耕作地の区画は畑作に伴って設けられたことが明らかである。

なお、前述の素掘り溝群の上面にあたる耕作土直下においても南北方向の素掘り溝を検出している。

土坑群

耕作土除去後、西半部では平面が不整形な大型の土坑を多数検出した。土坑の埋土は灰色土である。土師器・瓦器・陶磁器等の細片が混じる。時期は明らかではないが、素掘り溝とほぼ同時期、またはそれ以降のものと思われる。

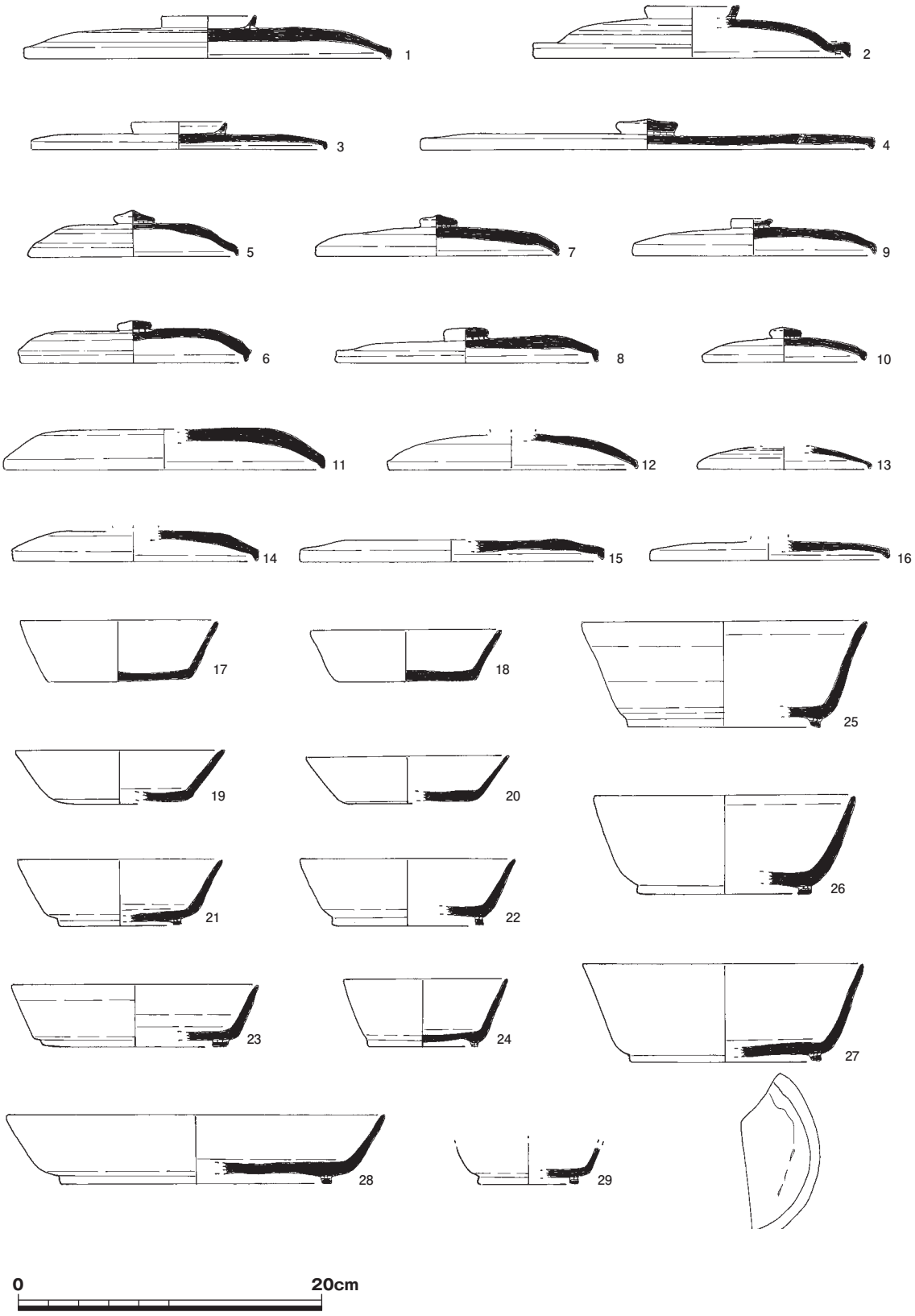
4　出土遺物

遺物の大半は、南北方向の溝跡内から出土したものである。ここでは奈良～平安時代の遺物について概略を報告する（第 6 図～第 8 図）。

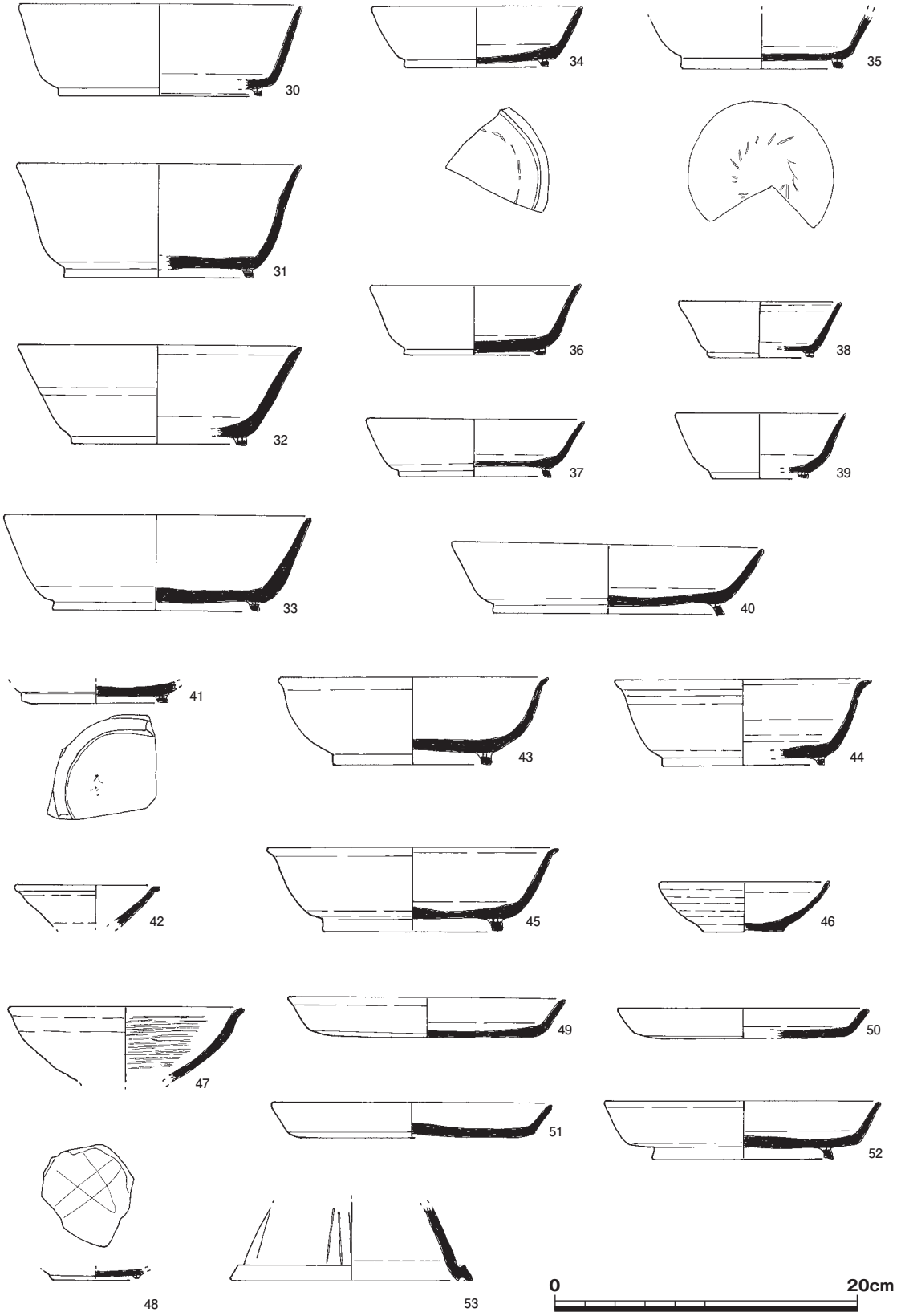
須恵器蓋（1 ～ 16）　1 ～ 3 は輪状つまみを持ち、4 ～ 10 は宝珠つまみを持つものである。2 は笠形の天井部から口縁部で屈曲し、1・3 は平坦な天井部から口縁部へ至る。5 ～ 6 は天井部の形態が笠形で、15・16 は平坦である。4 は口径約 29.8cm の大型品で、10 は口径 10.6cm の小型品である。

須恵器杯（17 ～ 41）　17 ～ 20 は高台を持たない杯で、平らな底部から外反気味に立ち上がる口縁部を持つ。21 ～ 41 は高台を持つ杯で、口縁部の形態、高台の位置及び形態に相違がみられる。高台が底部と口縁部の境からやや内側に付すものと境に付すものがあり、高台の形態は、下方に下がるものと外側に踏ん張るように付されるものとがある。また、口縁部は外方向へ直線的に立ち上がるものと外反するものがある。27・34・35 は底部外面に円を描くように爪圧痕が巡る。法量は口径 14cm、高さ 4cm 程度のものと、口径 18cm、高さ 6cm を超える大型品に大別される。28 は口径 25.8cm、高さ 4.4cm を測る、盤状の大型品である。

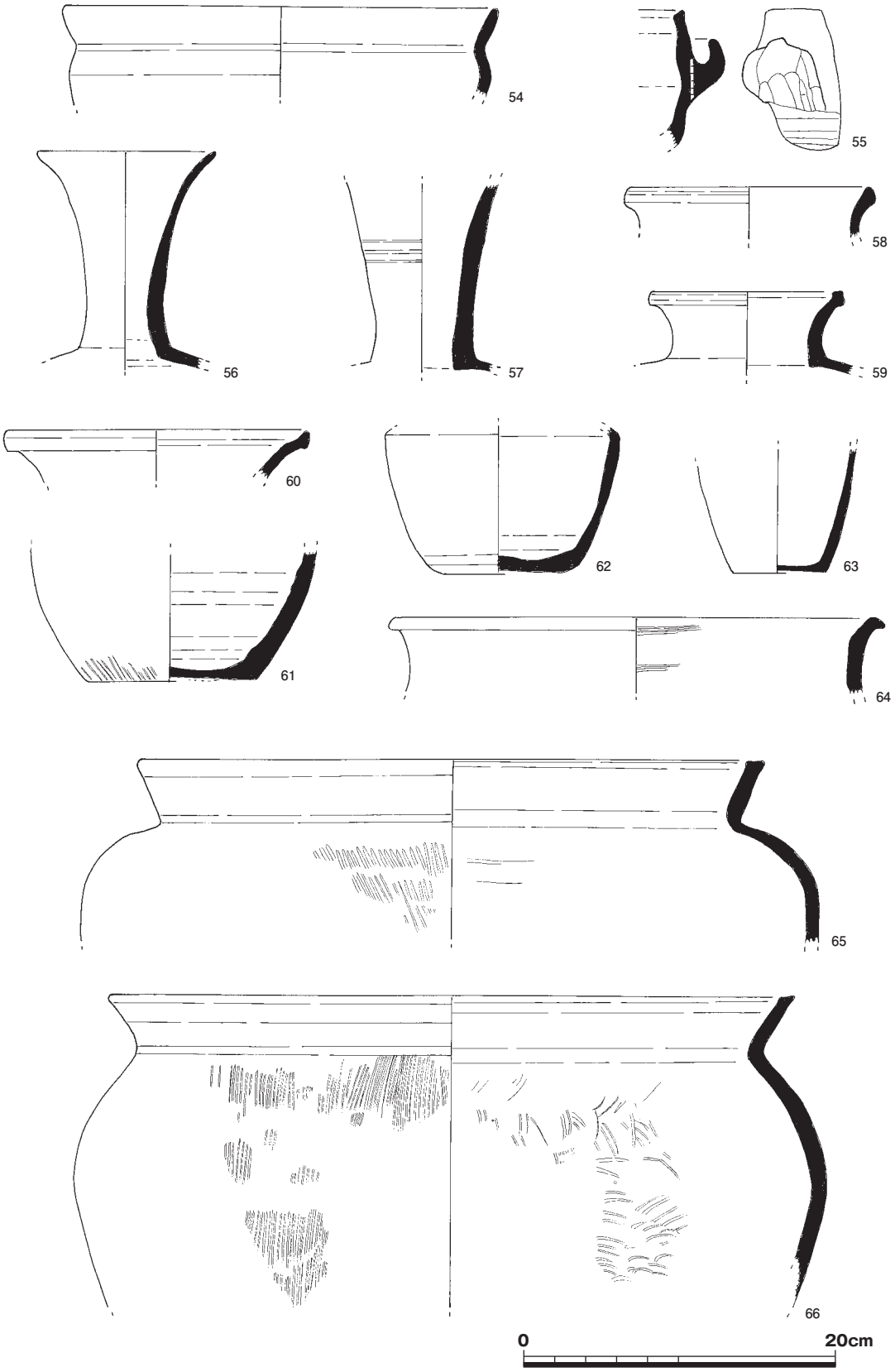
41 は底部外面に墨書が施され、「大宅」と読める。



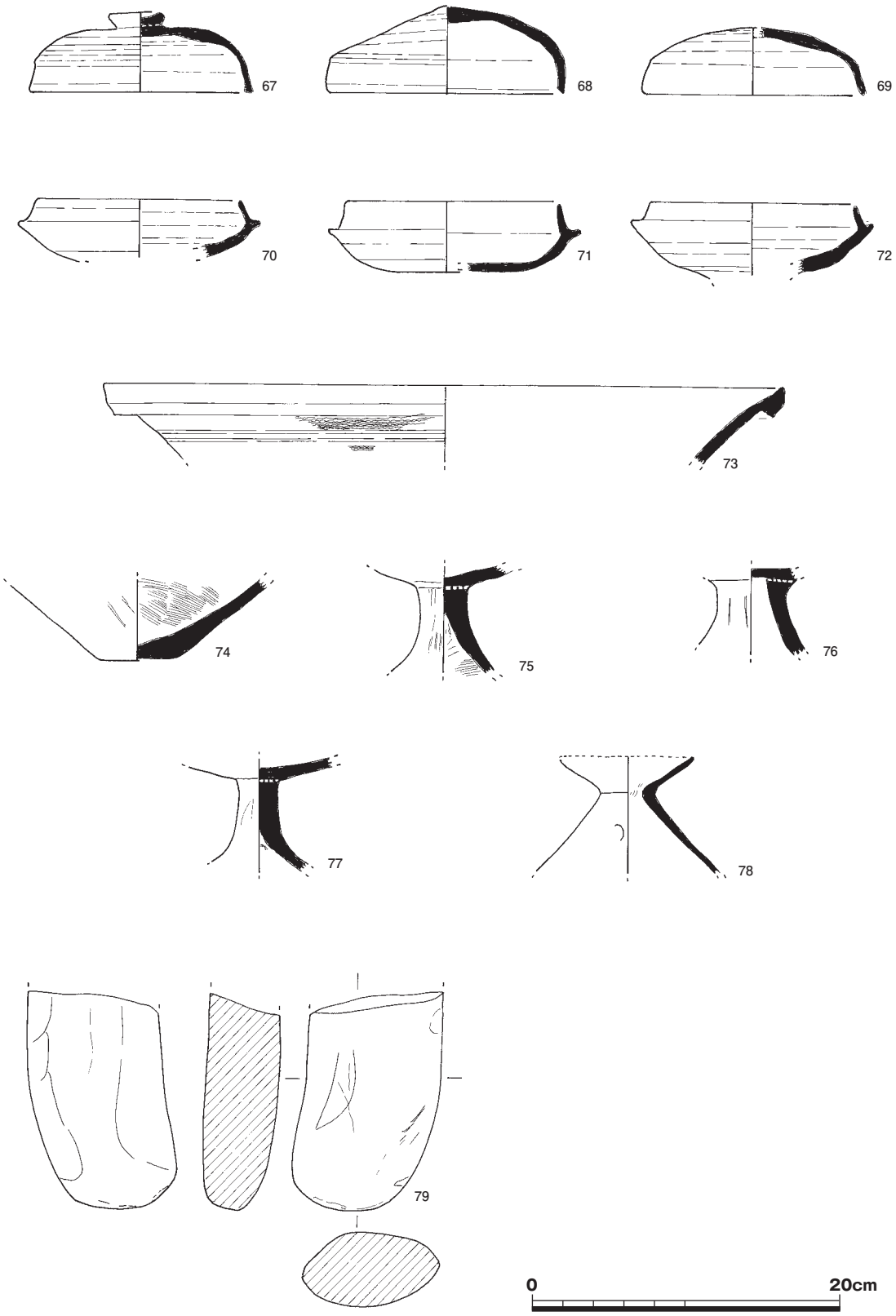
第６図　出土遺物実測図１（1/4）



第７図　出土遺物実測図２（1/4）



第８図　出土遺物実測図３（1/4）



第９図　出土遺物実測図４（1/4）

須恵器椀（42 ～ 46）　43 ～ 45 は高台を持つもので、46 は高台を持たないものである。高台を持つものは、底部から口縁部まで内湾気味に立ち上がり、43 ～ 45 は口縁端部が外反し、46 は端部まで内湾する。42 は大きく外方向に直線的に立ち上がり、端部は大きく外反する。口径 4.8cm の小型品である。

黒色土器椀（47・48）　内湾気味の口縁部から端部が外反し、内面はミガキを施し、内面見込みの暗文を描く。高台は断面三角形で高さは低い。

須恵器皿（49 ～ 52）　52 は高台を持ち、49 ～ 52 は高台を持たない。平らな底部から上外方に短く立ち上がる口縁部を持ち、口縁部やや外反してのびる。口縁端部はやや肥厚するものと丸く終わるものがある。

須恵器円面硯（53）　円面硯の脚台部である。脚台部はわずかなに内湾しながら「ハ」の字状に開き、刻線が施されている。脚端部は外反し外端側が面をなして、その上下端を少し拡張させている。

須恵器鉢（54・55）　54 は口縁部でＳ字状に屈曲し、短く口縁部はなだらかに外方向にひらく。端部は丸い。55 は体部が上方に内湾しながら立ち上がり、口縁端部は内傾する面を持つ。体部に把手を付す。

須恵器壺（56 ～ 64）　56・57 は長頸壺で、長く直立する頸部から外反する口縁に至るもので、58･59･64 は「ハ」の字状に短く開く口縁部を持つものである。60 は外反しながら口縁部に至り、口縁端部は上方を向くもので、広口壺の口縁部と思われる。61 ～ 63 は壺の底部である。

須恵器甕（65・66）　外方向に立ち上がる体部と「く」の字状に屈曲する口縁部を持つ。端部は平坦である。口径 40cm を超える大型品である。

弥生～古墳時代遺物（67 ～ 79）溝跡内から、奈良～平安時代の遺物とともに古墳時代の須恵器杯身・杯蓋及び弥生時代の高林・石製品等が出土した。

5　おわりに

今回の調査では屈曲すると想定される２条の溝跡を検出し、また、溝内からは奈良時代後半から平安時代初頭にかけての須恵器が多量に出土し､｢大宅｣の文字が書かれた墨書土器が出土した。｢大宅｣の文字は､周辺に官衙的性格をもつ建物（施設）があったことを推測することが可能であり、出土地点は離れるが､京都縦貫自動車道建設に伴う調査においても､｢大家｣（1 点）､｢小家｣（2 点）と建物・施設を表すものが出土している。

このように「大宅」の存在から考えると、検出した２条の溝は人為的に穿たれたもので、建物（施設）群の北辺及び東辺を画する機能を有していた可能性が考えられ､国府の存続時期と一致し、注目されるものである。

また、今回の調査では遺構を確認していないが、前述の溝内からは弥生時代及び古墳時代の土器が出土している。丹波国府が推定されている範囲では、これまで弥生時代中期の竪穴建物跡・方形周溝墓等を、また自然流路から古墳時代前期から中期にかけての土器が多量に出土し、さら

に後期の竪穴建物跡・溝・土坑群等を検出していることから、調査地周辺にも同時期の集落跡が存在するものと考えられる。

以上のように、今回の調査では官衙的性格が濃い遺構を検出するなど、貴重な成果を得ることができた。また、本調査地の南東約 150m の地点で、奈良時代中期の埋納遺構も検出されていることから、周辺部に国府存続時期の遺構が広がる可能性が高い。

これらの調査成果をもとに、今後のほ場整備の工事計画について関係機関と調整を図りながら、遺跡の保護を進めていく必要である。

(2) 東加舎遺跡第3次発掘調査（平成28年度）

1　はじめに

亀岡盆地より、朝日山・行者山を挟んで西側に、園部川の支流である本梅川が形成した谷底平野的な地形を呈する本梅盆地がある。本梅町はこの南に位置しており、半国山南麓や朝日山西麓に形成された扇状地上に集落が営まれている。半国山南麓及び朝日山西麓には、それぞれ摂津国へ抜ける街道が通り、本梅町域は古来より丹波と摂津をつなぐ交通の要衝であった。

さて、本梅町域には平安時代より野口荘、賀舎荘といった荘園が存在したことが確認される。

野口荘は、本梅町から東本梅町、南丹市（船井郡園部町）に拡がる広大な領域を占めた荘園とされ、藤原道長の日記『御堂関白記』の長和5年（1016）10月19日条に、常陸守平維時から貢納された雌馬二十頭を放ったとあるのが初見とされる。その後、一部が長講堂領に寄進され、残る部分が賀舎荘（本梅町東加舎と西加舎に比定）になったと考えられている。

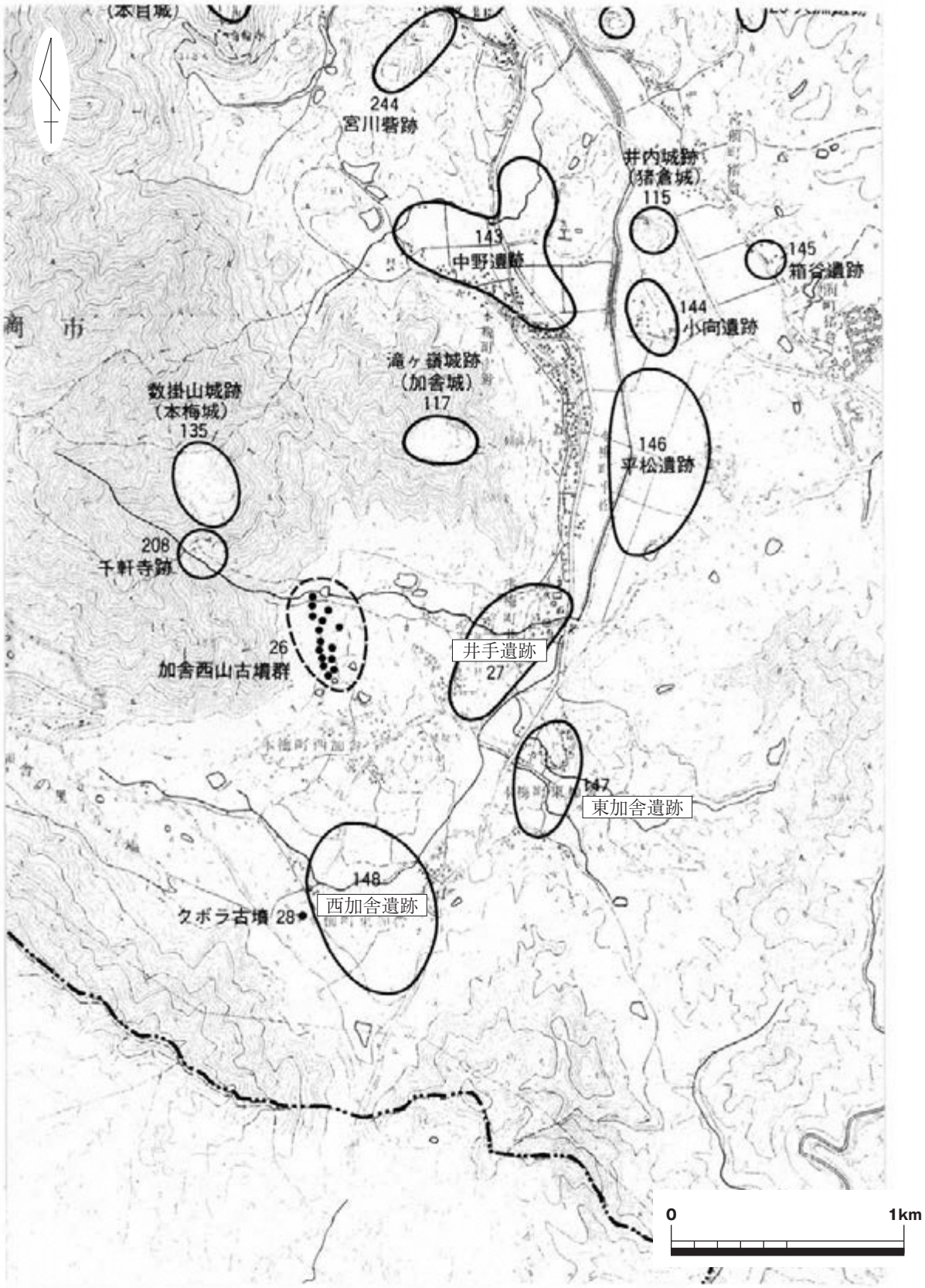
賀舎荘は、康治2年(1143)4月14日付の『丹波国諸荘園目録』(『兵範記裏文書』)の記載が初見で、摂政藤原忠通から娘の聖子（のちの皇嘉門院）に譲渡されていたことがわかる。鎌倉期には忠通の三男である九条兼実の系統に伝領され、以後九条流一門の荘園となった。

野口荘のうち上村地域は本梅町平松付近に比定されているが、室町時代には禁裏御料所となり、中世末まで皇室へ米や炭を供給し、窮迫する皇室経済を支えた数少ない所領であった。上村の代官には、香西氏や波多野氏など丹波国守護細川氏の被官が任ぜられたが、この代官職をてこにして、戦国時代に波多野氏らが権力を拡大させたと考えられる。本梅町北側の半国山南頂にある数掛山城は、16世紀前半に「波多野与兵衛尉方城」(『細川両家記』）と出てくる地に比定されており、波多野氏が城郭を築きこの地域を支配したと考えられる。

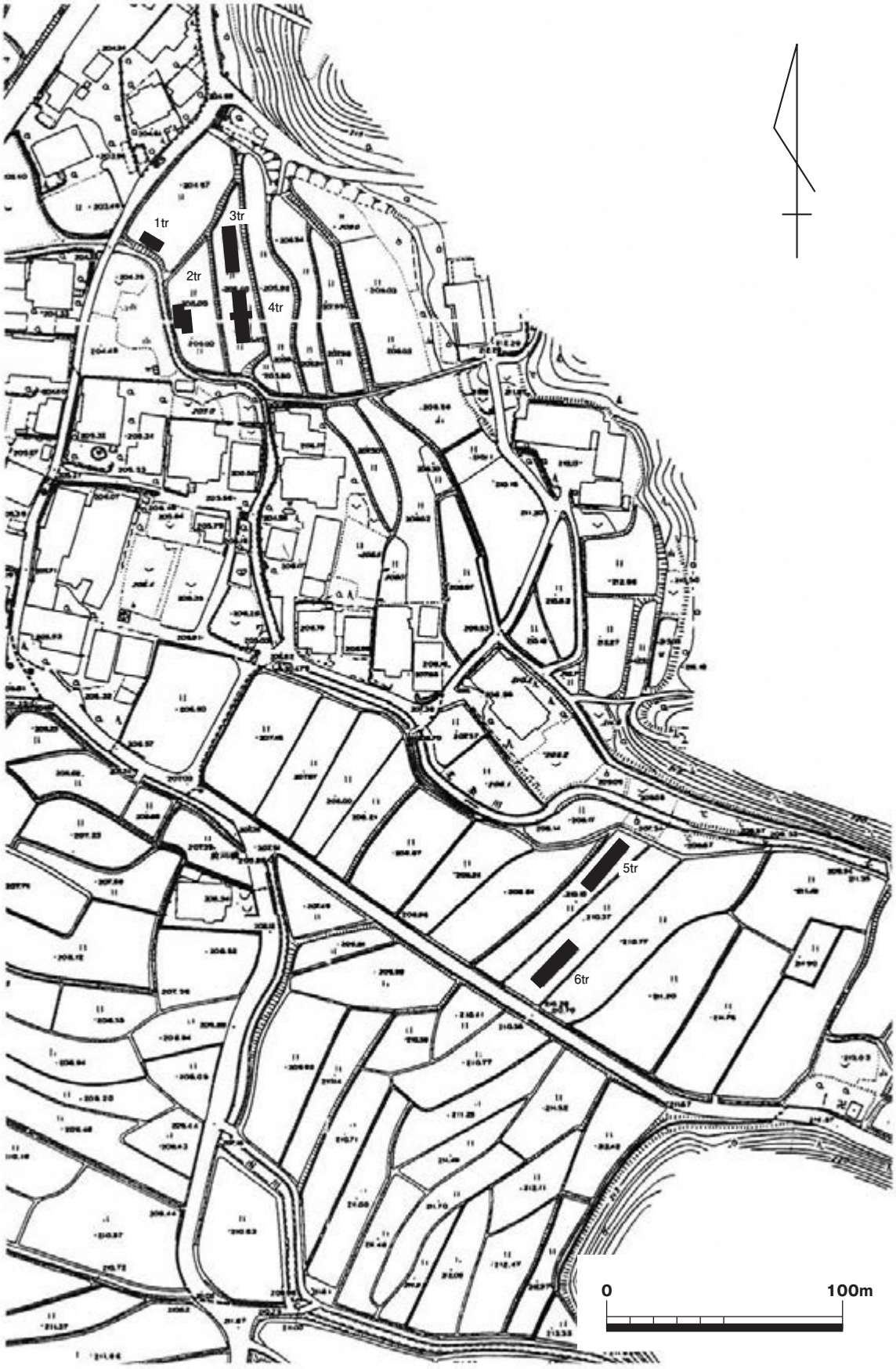
波多野氏の支配の前提として注目されるのが、当地域の寺社勢力の存在である。数掛山城の南西には千軒寺跡が認められるが、山頂に石垣が現存しており、大きな縄張りを構える山岳寺院であったと推測される。この南の丸岡山に位置する延福寺は、久寿元年（1154）開創とされる真言宗の寺院で、天和3年（1683）の年代記に杉本坊以下寺家12坊を従えていたことが記されている。また平松にある桂林寺には天文11年（1542）の銘を持つ梵鐘があり、「天王寺」として中世以前よりこの地に存在していたと推測されている。

このように中世には当地域に複数の寺社が存在していたのであり、門前町や街道が接する地には都市的な場が形成されていたと想定される。波多野氏はこうした寺社勢力の形成した都市的な場である当地に注目し、城郭を築いたと言えるだろう。

江戸時代には、本梅町域の村々は複数の藩領と旗本領により分割支配され、西加舎村が亀山藩領、中野村･平松村が園部藩領、東加舎村･井手村が前田氏の知行地（旗本領）となった。ただし、支配のしくみとは別に地域的な結びつきは強く、西加舎村･井手村･平松村･中野村の4カ村では、北西部に位置する山の管理権をめぐって近代にいたるまで山相論が続けられていたし、東加舎村と西加舎村は、屋磨内神社と加舎神社の祭礼行事によって結びついていた。また西加舎村・井手



第 10 図　調査対象遺跡及び周辺主要遺跡分布図（1/25,000）



第 11 図　調査地配置図（1/2,500）

村・平松村・中野村を通り摂津国宿野へ抜ける街道と、東加舎村を通り妙見口へ続く妙見街道とは近世を通じて主要街道として位置しており、街道沿いには宿場町も形成されていた。本梅町域は中世から近世、近代に至るまで交通の要衝として発展したのである。

本梅町ではこれまで、井手遺跡・東加舎遺跡・西加舎遺跡において、平成 10・11 年度に府営ほ場整備に伴う範囲確認調査が実施され、また平成 26・27 年度に国営緊急農地再編整備事業が本梅工区で実施されるに伴い本発掘調査（小規模）を実施した。調査の結果、平成 26 年度の調査で井手遺跡・西加舎遺跡で土坑や溝状の遺構が数基検出されている。

以上の成果と工事実施計画に基づき、遺構が滅失する恐れがあるほ場を対象として調査地を設定し、平成 28 年度は東加舎遺跡で調査を実施した。調査は、平成 29 年 2 月 22 日から実施し、同年 3 月 23 日に完了した。

調査にあたっては土地所有者の方々をはじめ、本梅町国営ほ場整備推進協議会、本梅町自治会に多大な御協力、御理解をいただいた。心より感謝したい。

2　調査経過

調査地は、東加舎深田の基幹水路建設予定地で 2m × 5m のトレンチ 2 箇所（北から第 1 トレンチ、第 2 トレンチと呼称）、同ほ場部分で 2m × 15m のトレンチ 2 箇所（北から第 3 トレンチ、第 4 トレンチと呼称）、東加舎北森のほ場部分で 2m × 15m のトレンチ 2 箇所（西から第 5 トレンチ、第 6 トレンチと呼称）を設定した。

2 月 21 日より第 1 ～第 4 トレンチにて重機による表土掘削を開始し、翌 22 日より人力による掘削作業を開始した。3 月 6 日より第 5・第 6 トレンチにて重機掘削を開始し、同日より人力による掘削作業を開始した。

3 月 9 日に京都府教育庁指導部文化財保護課による現地指導をうけ、第 2 トレンチの一部を拡張して調査を実施した。3 月 23 日に掘削作業が完了し、同 27 日に現地引き渡し協議を実施した。翌 28 日に事務所、トイレなどを撤収。調査を完了した。

3　調査概要

○第 1 トレンチ

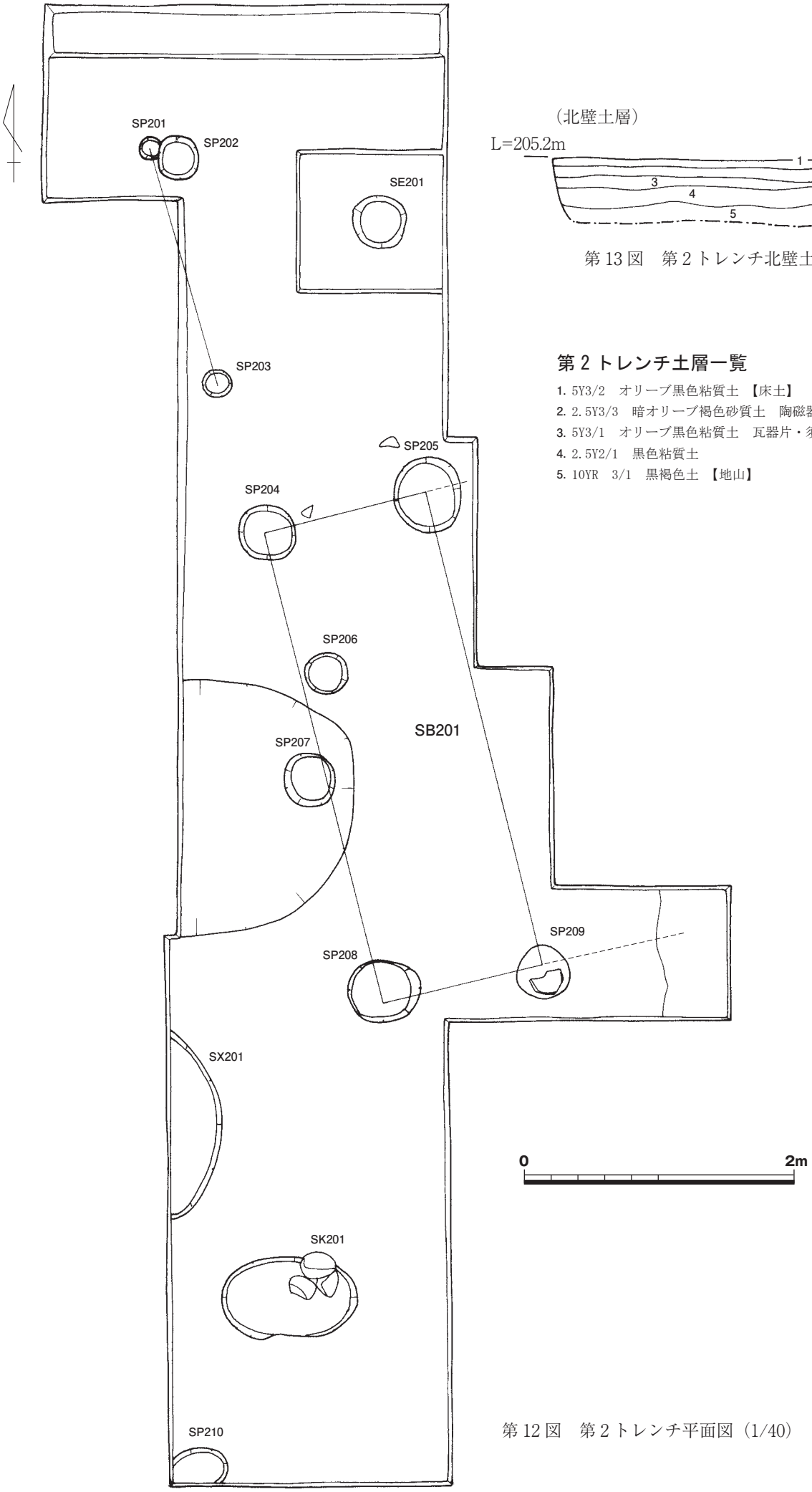
東加舎深田の基幹水路建設予定地に設定した北側のトレンチである。

床土（黒褐色粘質土）の直下、地表面から約 44cm 掘削したところで地山を確認した。遺構・遺物は検出されなかった。

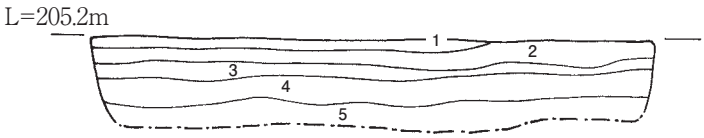
○第 2 トレンチ

東加舎深田の基幹水路建設予定地に設定した南側のトレンチである。

第 2 トレンチでは、井戸跡 SE201、柱穴跡 SP201 ～ 203･206･210、掘立柱建物跡 SB201（SP204･



（北壁土層）

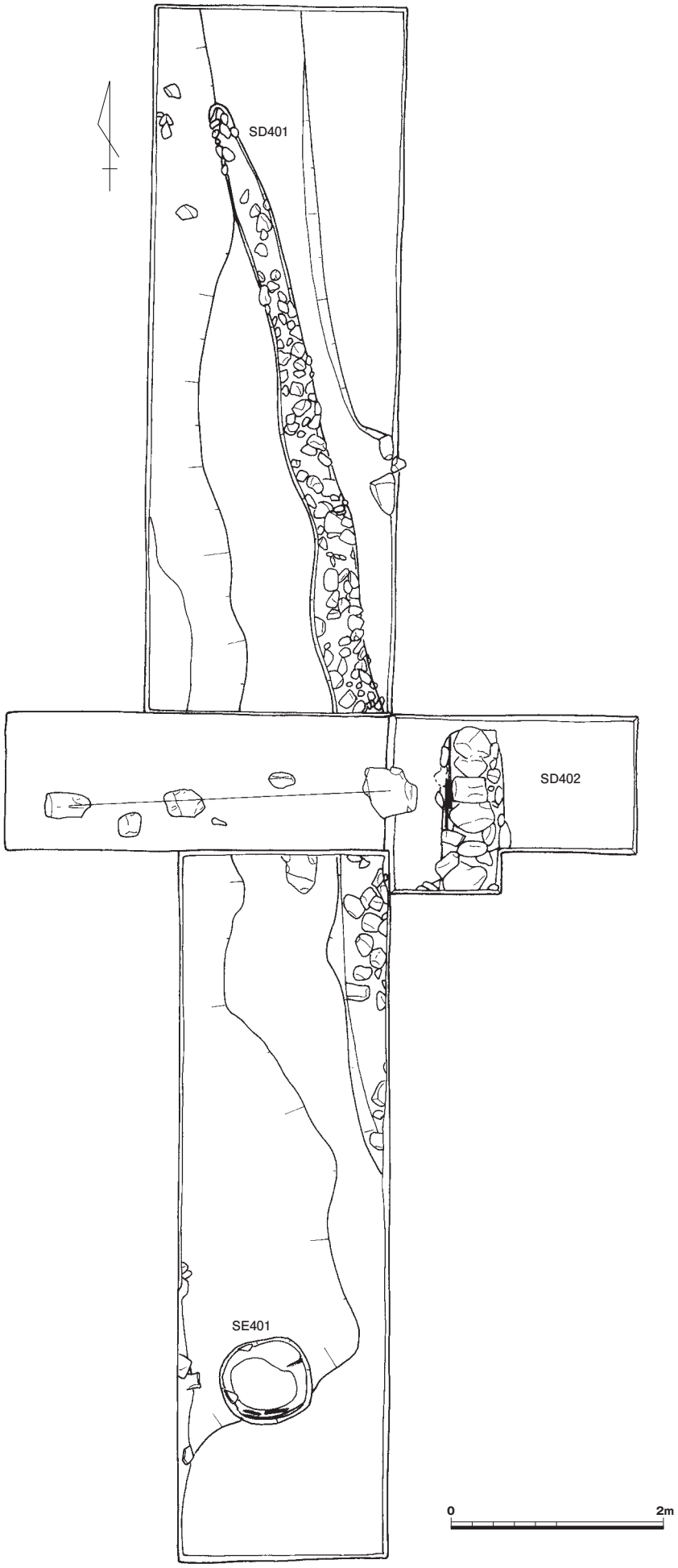


第 13 図　第 2 トレンチ北壁土層断面図（1/40）

第 2 トレンチ土層一覧

1. 5Y3/2　オリーブ黒色粘質土　【床土】
2. 2.5Y3/3　暗オリーブ褐色砂質土　陶磁器片・瓦片含む
3. 5Y3/1　オリーブ黒色粘質土　瓦器片・須恵器片含む
4. 2.5Y2/1　黒色粘質土
5. 10YR　3/1　黒褐色土　【地山】

第 12 図　第 2 トレンチ平面図（1/40）



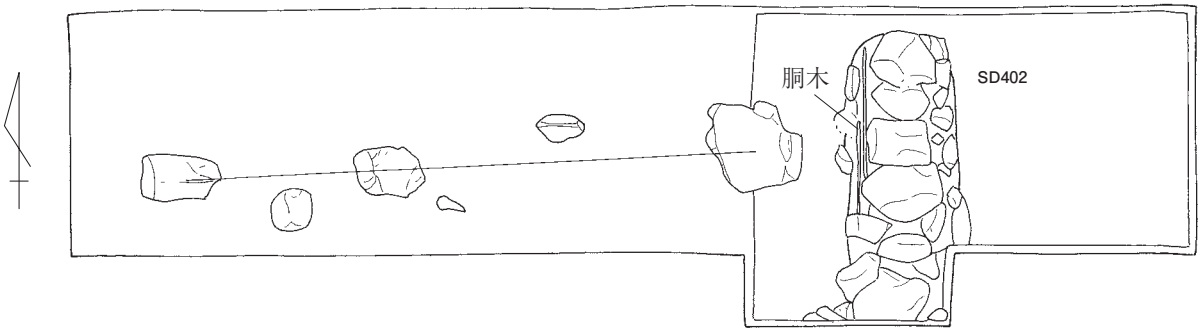
第 14 図　第 4 トレンチ平面図（1/60）

第 4 トレンチ土層一覧(第 15 ～ 17 図共通)

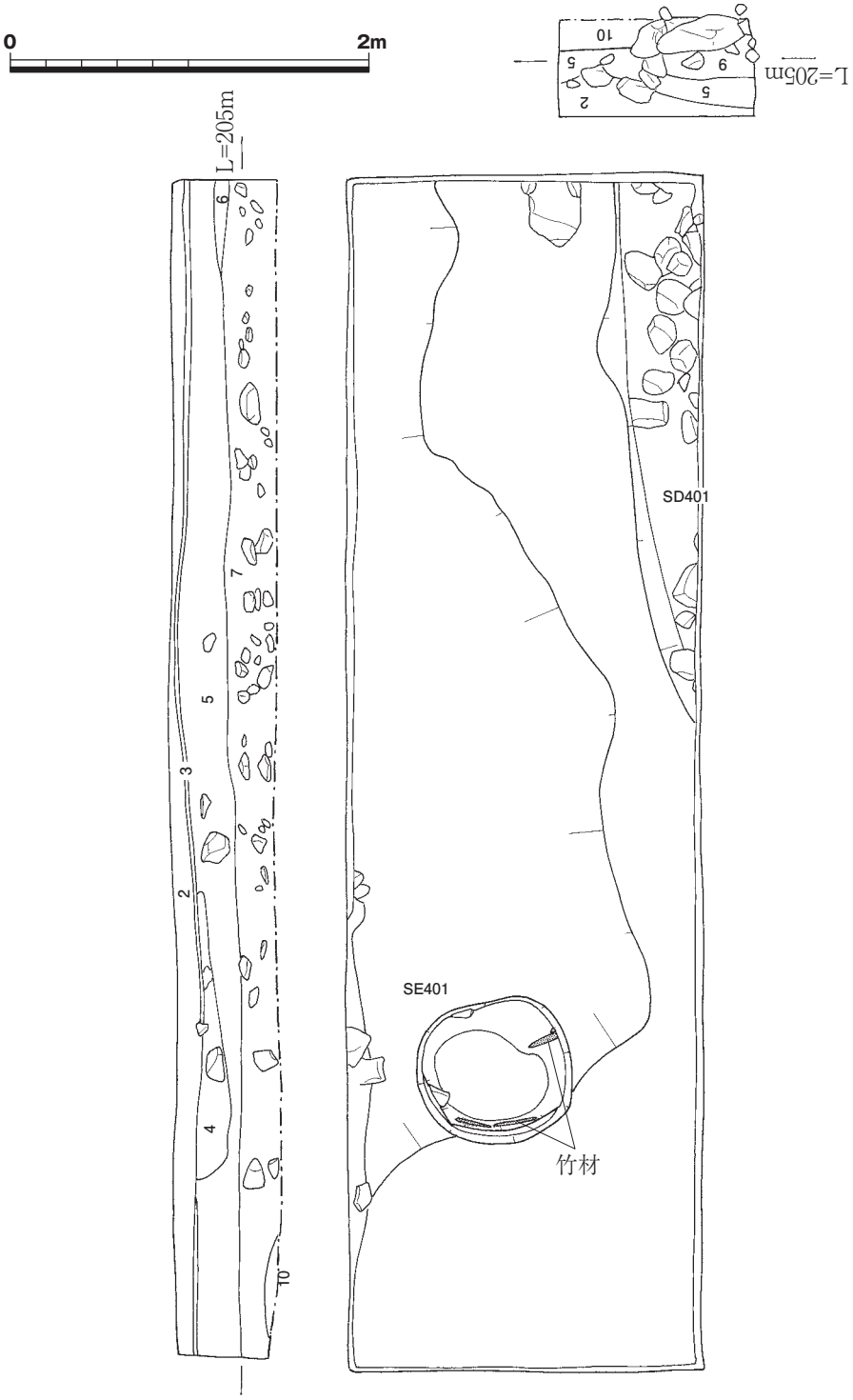
1. 5Y4/2　灰オリーブ色砂質土
2. 10YR3/4　暗褐色砂質土 【床土】
3. 10YR4/6　褐色砂質土 【整地土】
4. 5Y4/2　灰オリーブ色砂質土
5. 5Y4/1　灰色粘質土
6. 5YR3/1　黒褐色砂質土
7. 10YR2/2　黒褐色砂質土　砂利含む
8. 2.5Y3/2　黒褐色砂
9. 2.5Y3/3　暗オリーブ褐色砂
10. 5Y4/1　灰色粘質土【地山】

0　2m

第 15 図　第 4 トレンチ北側平面図・土層断面図



第 16 図　第 4 トレンチ中央部平面図・土層断面図



第 17 図　第 4 トレンチ南側平面図・土層断面図

205・207・208・209)、土坑 SK201、性格不明の遺構 SX201 を検出した。平面図及び土層図は、第 12・13 図に示すとおりである。

SE201 は第 3 層（暗オリーブ褐色砂質土）の上面で検出した。直径約 40cm、深さは約 50cm である。第 3 層から桟瓦片や陶磁器片、銭貨（寛永通宝）が出土したことから SE201 は近世以降の遺構と判断される。内部には水分を多く含んだ灰色砂質の埋土が確認され、当該期に設けられた井戸跡と推測される。

SP201 と SP203、SB201 は第 4 層の上面で検出した。

SP201、203 の直径は約 20 ～ 22cm、深さはともに約 9.6cm である。掘立柱建物の一部または柵と思われるが、詳細な性格は不明である。この柱穴列の主軸方向は、座標北から約 9 度西に振る。

SB201（SP204、207、208、209、205）の柱穴の直径は約 38cm ～ 54cm で、深さはいずれも約 15cm を測る。SP204・205 の柱間距離は約 1.2m、SP204・207、SP207・208 の柱間距離は約 1.8m である。主軸方向は、座標北から約 7 度西に振る。掘立柱建物の一部と思われるが、詳細な性格は不明である。

柱穴跡の配置から建物跡が東側に広がると想定し、SP209 の東側を拡張して精査したが、自然流路と思われる砂質土を検出するのみで、柱穴は確認できなかった。これより東側及び SP205 の東側は調査対象地から外れるためこれ以上の拡張は行わなかった。

SP201、203 及び SB201 の柱穴からは遺物は検出されず、それぞれの遺構年代は不明と言わざるを得ないが、主軸の傾きが異なっていることから、両者は異なる時期に建造されたものと思われる。

SP206 は第 4 層の上面で検出した。このピット内から土器の細片を検出したが、実測のできるものではなく時期は判然としない。

SK201 は第 4 層の上面で検出した。長辺約 100cm、短辺約 58cm の楕円形である。土坑内から遺物は検出されなかった。

SX201 は、調査地区外に拡がるため遺構の性格は不明である。

○第 3 トレンチ

東加舎深田のほ場部分に設定した北側のトレンチである。

床土の直下、地表面から約 15cm 掘削したところで地山（黒褐色シルトと黄褐色礫土の互層）を確認した。遺構・遺物は検出されなかった。

○第 4 トレンチ

東加舎深田のほ場部分で設定した南側のトレンチである。

第 4 トレンチでは、溝跡 SD401、402 と井戸跡 SE401 及び近世の建物跡の礎石を検出した。平面図及び土層図は、第 14 ～ 17 図に示すとおりである。

近世の建物礎石跡は、床土直下の褐色砂質土（第 3 層）の上面で検出した。

礎石は東西の正方位に３つ並ぶ。東側と中央の礎石の間隔は約１間（1.8m）であるが、中央と西側の礎石との間隔は約 1.2m で１間に満たない。

礎石を上面で検出したことから、この褐色砂質土は建物建築に伴う整地土であると考えられる。この整地土の広がりを観察すると、南北は第４トレンチ北端から南に約 4.5m に確認される石がある地点以南、調査区南端にも確認され、東西は先述の東側の礎石がある地点以西、調査区西端にも確認される。ここから第４トレンチを含む南西部分、西接する畑地にまたがって建物があったものと推測される。

SD401 は第４トレンチを南北方向に走る溝跡で、第６層の上面で検出された。幅は約 40cm である。第６層を掘削すると約 10cm ～ 20cm の拳大の礫（レキ）が敷き詰められている状況が検出された。もともと水路として利用されていた溝を、整地するために礫（レキ）を人為的に入れたものと推測する。なお第４トレンチ南端から約 50cm 南東に設定したトレンチでも SD401 につながると思われる溝跡が検出されたので、SD401 の南北は 14m 以上になり、調査区南で現在も東西に流れる水路に接続した可能性がある。

SD402 は第４トレンチ中ほどから南に走る溝跡で、第５層の直下で検出した。幅は約 50cm である。約 30cm の人頭大の礫が南北に規則正しく並べられており、礫直下の東西端に胴木が通っていたことから、暗渠と考えられる。土層の関係から、この暗渠が設置された時期は SD401 よりも上るものと判断されるが、方位が南北の正方位を向いていることから、第３層で検出された建物跡と関連する可能性がある。

SE401 は地山（第 10 層）の上面で検出された井戸跡で、直径 86cm・深さは約 60cm を測る。SE401 からは、土器は検出されなかったが、井戸内周縁部から竹材が複数検出されるとともに埋土中から木製蓋の部分が検出された。

第４トレンチ西側には西に向かって下がる自然の落ちが認められるが、SE401 はこの落ちの南東端に位置する。この落ちから人頭大・拳大の礫が大量に確認されたが、礫が部分的に検出されること、礫に須恵器や土器片が混ざることから、自然の転石とは異なり、この井戸あるいは落ちを埋めて整地するために人為的に投入されたものと推測される。

○第５トレンチ

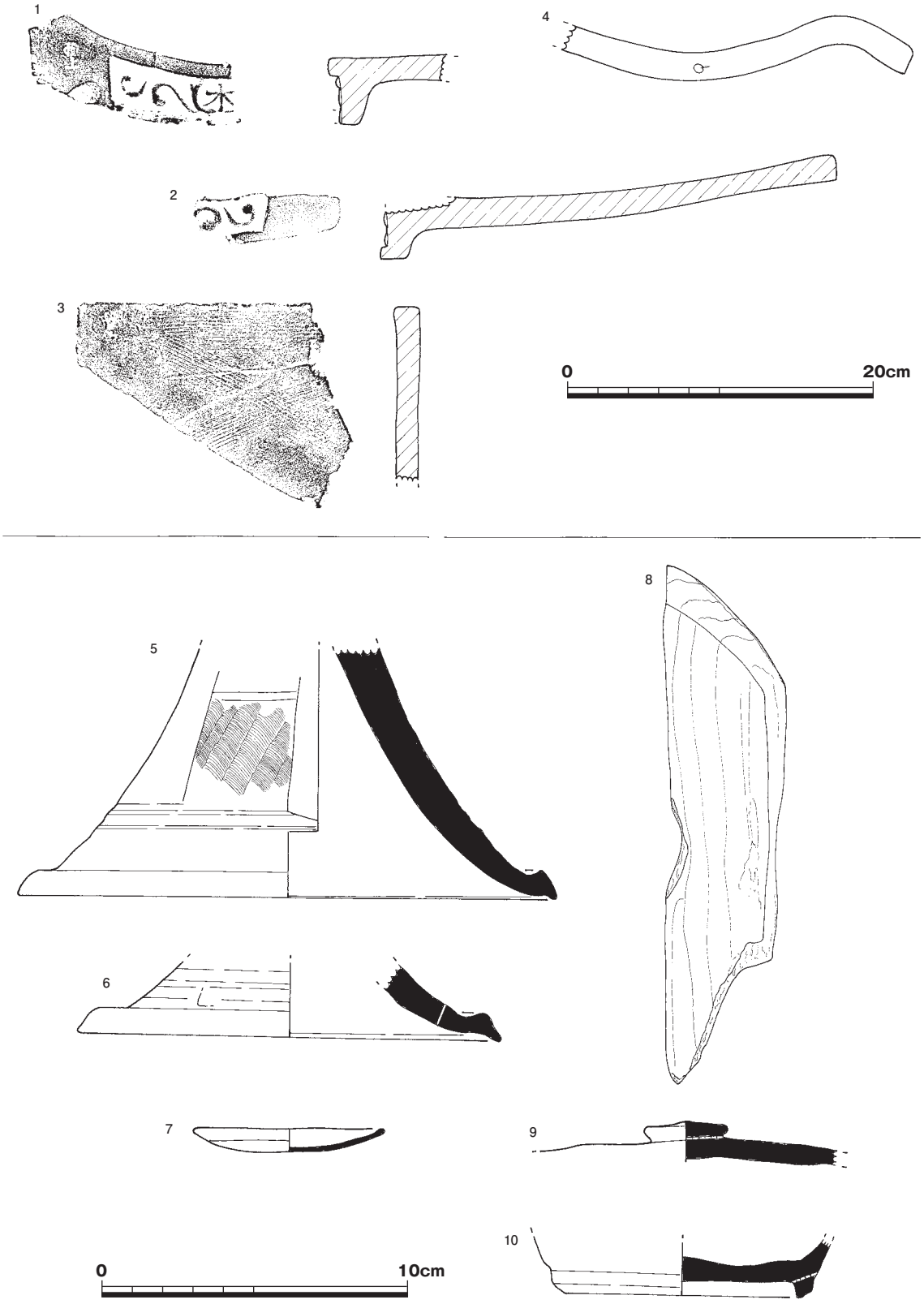
東加舎北森のほ場部分で設定した西側のトレンチである。

第５トレンチでは、床土直下で旧耕作土と思われる灰色砂質土層が検出され、この土層から奈良～平安期の須恵器片等（第 18 図　9・10）が出土した。この下層が地山（黒褐色シルトおよび礫）である。遺構は検出されなかった。

○第６トレンチ

東加舎北森のほ場部分で設定した東側のトレンチである。

第６トレンチでは、床土直下に黒色砂質土層が検出され、この土層から瓦器の細片などが出土



第 18 図　出土遺物実測図（土器・木片：1/2・瓦：1/4）

したが、遺構は確認できなかった。

第５・第６トレンチとも床土直下の土層で遺物が確認されたが、遺構が認められなかった。周辺部に遺構があると推測される。

4　出土遺物

出土遺物の総量はコンテナ２箱に収まる。他所からの流れ込みと思われるものが多く、遺構に共伴するものの多くは第４トレンチで検出した近世以降の瓦である。

１は第２トレンチから出土した軒平瓦である。瓦当部には、中央に「木」の字、両脇に唐草文が認められる。唐草文の外区には「極上」の文字が刻まれている。なお、同じ土層からは真鍮製の貨幣（寛永通宝）が出土している。

２～８は第４トレンチから出土したものである。

２は、第５層・灰色粘質土から出土した軒平瓦である。大部分が欠損するが、唐草文の一部が認められる。３・４は第５層から出土した桟瓦である。４の側面には直径約８ミリの「○」の刻印が認められるが、何を意味するものか不明である。

５・６は、須恵器高坏の脚部である。ともに第６層・黒褐色粘質土から出土した。５は方形の透かしが認められ、裏側に波状紋が見られる。

７は第６層から出土した土師皿である。口径は6.2cmを測る。胎土は良好で焼成はやや軟質である。

８はSE01の埋土中から出土した木製蓋の部分である。中央部に円形の穴が開いていたと思われる痕跡があり、端には穴が穿たれている。もともと蓋として使用されていたものが幾度か転用されたものと考えられる。放射性炭素年代測定の結果（p30－32）では、17世紀中頃以降のものと推定されている。

９・10は第５トレンチから出土したものである。

９は、灰色砂質土から出土した須恵器の蓋である。つまみの部分は貼付けた後にナデで仕上げられている。10は９と同じ土層で出土した須恵器杯Ｂの高台部分である。ロクロ成形後高台を貼り付け、ナデで仕上げられている。

5　まとめ

今回の調査では、東加舎遺跡地内で６箇所のトレンチを設定したが、遺構が検出されたのは、第２トレンチ・第４トレンチの２箇所である。

第２トレンチでは、近世以降の井戸跡と、掘立柱建物跡や柱穴跡、土坑が検出された。掘立柱建物跡や柱穴跡は、柱穴から遺物は検出されなかったものの、これら遺構を検出した土層上面で瓦器や土師器のみが出土したことから中世以前の遺構と推測する。遺構の性格も、遺物がほとんどなく、調査面積が狭小のため明確な判断は難しいが、集落跡の一部と考えておきたい。

第４トレンチでは、近世以降の礎石建物跡とこれに関連すると思われる暗渠跡、暗渠以前の水

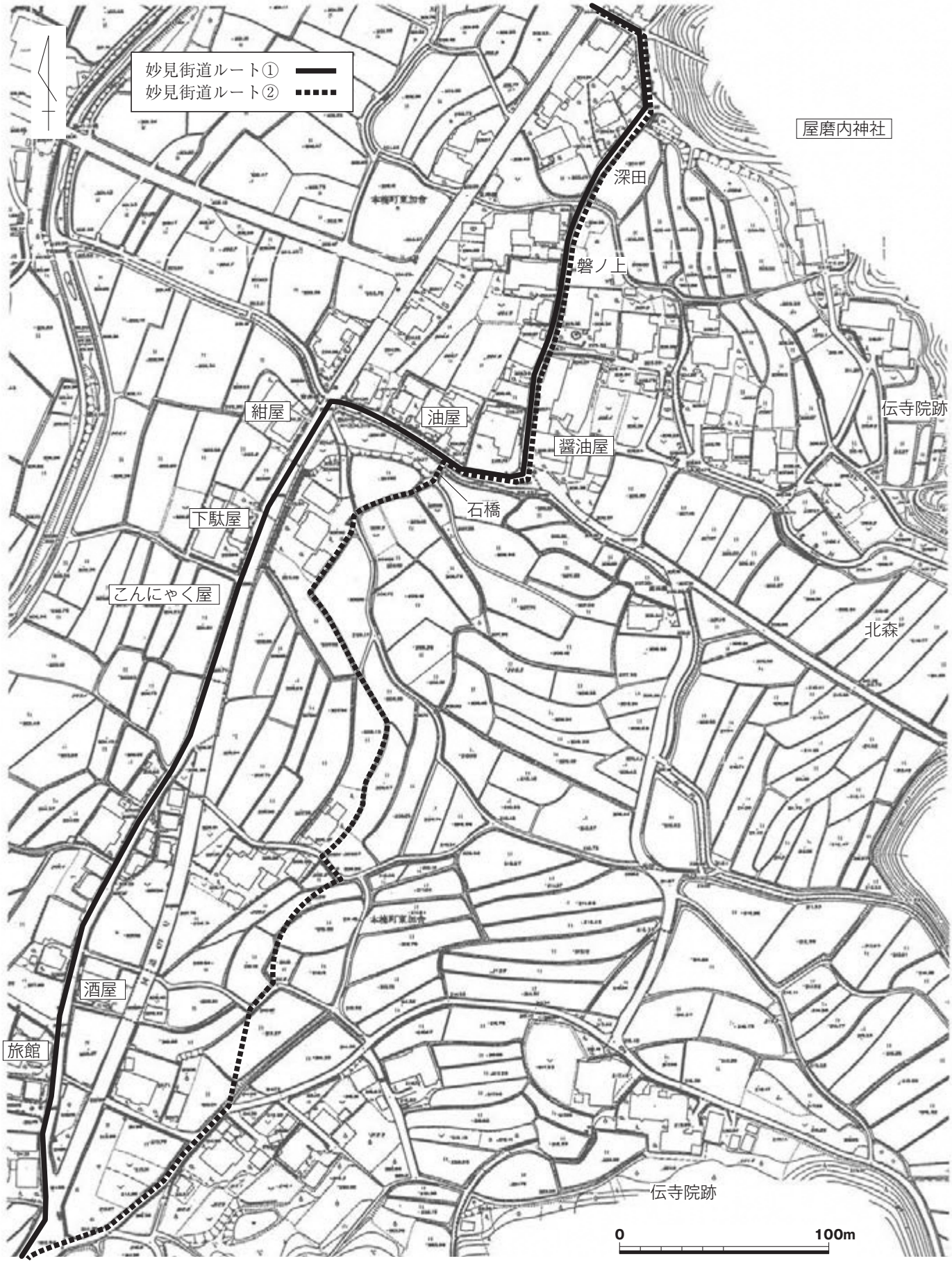
路や井戸跡が検出された。自然科学分析の結果からも遺構は近世を遡るものではない。

第２トレンチ・第４トレンチのある東加舎の深田では、近世以前に集落が存在したと考えられるが、井戸跡や溝跡、西側の傾斜面で土器片の混ざる礫や埋土が検出されたことから、この集落はある段階で廃絶し、耕作地に転用されたと推測される。そして、耕作地が整地されて再び屋敷地として使用された。第４トレンチで検出された屋敷地は先述の通り、調査地の西へ広がることが想定されるから、第２トレンチで検出された井戸跡もこれに関連する可能性がある。この屋敷地が現在のような耕作地に再転用された時期については、当地に伝わる記録等に、深田３番地にあった建物群が大正９年までに磐ノ上へ移転したことが確認できることから、大正９年頃と判断される。

以上のように、今回の調査地である東加舎深田においては、集落→耕作地→屋敷地→耕作地と土地利用がくり返し変化していることが看取されるのであるが、これはなぜだろうか。

東加舎では、大正時代の初めに現在の国道477号に指定される直線街道が整備されるが、それまでは東側の側道に入り、屋磨内神社参道前から南へ下り、醤油屋を西に折れて直線街道へ合流する道（第19図　ルート①）が幹線道路であった。現在もこの側道沿いに醤油屋や酒屋があり、「油屋」「下駄屋」「紺屋」等の屋号が残るのは、この沿いに町が形成されていたことの名残であろう。また、東加舎に伝わる伝承によれば、「油屋」の前に残る石橋を通って南下する道（第19図　ルート②）が旧来の妙見街道であったと言われ、さらに深田から北森へ抜ける農道がかつての街道であったとの伝承もある。いずれにしても、深田の地は近世以前の主要街道沿いに位置した地なのであり、そうした立地を背景に集落が形成されたものと推測されるのである。深田の地の土地利用が度々変化してきたのは、街道ルートの変遷と関係していると思われる。

街道（妙見街道）ルートの変遷によって、東加舎の人々も居住地を変化させてきた。今回の調査結果は、東加舎の人々の生活が街道の発展と密接に結びついてきたことを示す貴重な資料を提供するものであると言える。



第 19 図　妙見街道 位置図（1/2,500）

東加舎遺跡発掘調査出土遺物の自然科学分析

株式会社文化財サービス

1　はじめに

京都府亀岡市本梅町東加舎に所在する東加舎遺跡の井戸跡から出土した竹材と木製品（曲物底板）について、年代確認のための放射性炭素年代測定と、用材選択を確認するための樹種同定を実施した。

2　試料

試料は、井戸跡から出土した竹材と曲物底板である。竹材は大破片７片と微細破片多数がある中から、節部分の残る破片を選択し、節の反対側約半分を分割して試料とした。曲物底板は、年輪を観察した上で、破損している側の端部より、残存している中での最外年輪を含む２年分を採取して測定試料とした。樹種同定は、年代測定用に採取した木片から切片採取を行った。

3　分析方法

（1）放射性炭素年代測定

木片表面の土砂や付着物などをメスやピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。次に塩酸（HCl）や水酸化ナトリウム（NaOH）を用いて、試料内部の汚染物質を化学的に除去する（酸－アルカリ－酸（AAA）処理）。その後超純水で中性になるまで洗浄し、乾燥させる。なお、アルカリ処理は、0.001M ～ 1M まで濃度を上げ、試料の状況をみながら処理を進める。

上記した処理後の試料の燃焼、二酸化炭素の精製、グラファイト化（鉄を触媒とし水素で還元する）は Elementar 社の vario ISOTOPE cube と Ionplus 社の Age3 を連結した自動化装置を用いる。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を NEC 社製のハンドプレス機を用いて内径 1mm の孔にプレスし、測定試料とする。

測定はタンデム加速器をベースとした ^{14}C-AMS 専用装置を用いて、^{14}C の計数、^{13}C 濃度（^{13}C/^{12}C）、^{14}C 濃度（^{14}C/^{12}C）を測定する。AMS 測定時に、米国国立標準局（NIST）から提供される標準試料（HOX- Ⅱ）、国際原子力機関から提供される標準試料（IAEA-C6 等）、バックグラウンド試料（IAEA-C1）の測定も行う。

δ^{13}C は試料炭素の ^{13}C 濃度（^{13}C/^{12}C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表したものである。放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5,568 年を使用する。また、測定年代は 1950 年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma;68%）に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での勧告に従う（Stuiver & Polach,1977）。また、暦年較正用に一桁目まで表した値も記す。

なお、暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5,568 年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の 14C 濃度の変動、及び半減期の違い（^{14}C の半減期 5,730 ± 40 年）を較正することである。暦年較正は、OxCal4.3.2（Bronk,2009）を使用し、1 年単位まで表された同位体効果の補正を行った年代値および北半球の大気中炭素に由来する較正曲線（Intcal13；Reimer *et al.*,2013）を用いる。暦年較正結果は 1 σ ·2 σ（1 σは統計的に真の値が 68.2% の確率で存在する範囲、2 σ は真の値が 95.4% の確率で存在する範囲）の値を示す。

(2) 樹種同定

剃刀を用いて、木片から木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール，アラビアゴム粉末，グリセリン，蒸留水の混合液）で封入してプレパラートとする。プレパラートは、生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本と比較して種類（分類群）を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）や Richter 他（2006）を参考にする。

4　結果

放射性炭素年代測定結果および暦年較正結果を表１に示す。同位体効果の補正を行った測定値（補正年代）は、竹材が 220 ± 20BP、曲物底板が 150 ± 20BP である。また、暦年較正結果（2σ暦年代範囲）は、竹材が calAD1,646-1,675(43.7%),1,777-1,800(43.8%),1,941 以降(7.9%)、曲物底板が calAD1,668-1,697(15.6%),1,725-1,781(38.4%),1,797-1,815(11.2%),1,835-1,878(11.3%),1,916-1,945(19.9%)である。

また、樹種同定の結果、曲物底板は針葉樹のスギ、竹材はイネ科タケ亜科に同定された（表 1)。解剖学的特徴を以下に記す。

付表1.　放射性炭素年代測定・樹種同定結果

遺構番号	種類	δ13C (‰)	補正年代 (暦年較正用)	暦年較正結果				Code No.
				誤差	cal BC	cal BP	%	
井戸跡 竹材	生木(竹材) (イネ科タケ亜科)	-30.94 ± 0.18	220±20 (222±18)	σ	cal AD 1,657 - cal AD 1,666 cal AD 1,784　cal AD 1,796	cal BP 293 - 284 cal BP 166 - 154	28.8 39.4	PLD-35820
				2σ	cal AD 1,646　cal AD 1,675 cal AD 1,777　cal AD 1,800 cal AD 1,941 -	cal BP 304 - 275 cal BP 173 - 150 cal BP　9 -	43.7 43.8 7.9	
井戸跡 曲物底板	生木 (スギ)	-26.38 ± 0.17	150±20 (150±18)	σ	cal AD 1,678 - cal AD 1,692 cal AD 1,728　cal AD 1,765 cal AD 1,773　cal AD 1,776 cal AD 1,800　cal AD 1,811 cal AD 1,920　cal AD 1,940	cal BP 272 - 258 cal BP 222 - 185 cal BP 177 - 174 cal BP 150 - 139 cal BP　30 -　10	10.7 30.7 1.9 9.0 16.0	PLD-35821
				2σ	cal AD 1,668　cal AD 1,697 cal AD 1,725　cal AD 1,781 cal AD 1,797　cal AD 1,815 cal AD 1,835　cal AD 1,878 cal AD 1,916 - cal AD 1,945	cal BP 282 - 253 cal BP 225 - 169 cal BP 153 - 135 cal BP 115 -　72 cal BP　34 -　5	15.6 38.4 11.2 11.3 18.9	

1)暦年の計算には、0xcal4.3を使用。
2)yrBP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
3)付記した誤差は、測定誤差σ（測定値の68%が入る範囲）を年代値に換算した値。
4)暦年の計算には、補正年代に()で示した、1の位を丸める前の値を使用している。
5)年代測定結果の表記は、1の位を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、丸めていない値も付記している。
6)統計的に真の値が入る確率はσは68.2%、2σは95.4%である

・スギ（*Cryptomeria japonica*（L. f.）D. Don）　スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、1 分野に 2-4 個。放射組織は単列、1-15 細胞高。

・イネ科タケ亜科（Gramineae subfam. Bambusoideae）

原生木部の小径の道管の左右に１対の大型の道管があり、その外側に師部細胞がある。これらを厚壁の繊維細胞（維管束鞘）が囲んで維管束を形成するが、繊維細胞は放射方向に広く、接線方向に狭いため、全体として放射方向に長い菱形となる。維管束は柔組織中に散在し、不斉中心柱をなす。

5　考察

竹材は大破片 7 片と微細破片多数で構成され、元の大きさや詳細な形状は不明である。曲物底板は、円形の底板の約 1/3 が残っていると考えられ、板目板である。

これらの試料の補正年代は、竹材が 220 ± 20BP、曲物底板が 150 ± 20BP であった。暦年較正結果は、竹材が 17 世紀中頃～ 20 世紀中頃以降、曲物底板が 17 世紀後半～ 20 世紀中頃までの範囲を示している。2 点の試料の示す暦年代範囲はよく似ている。今回の結果から、井戸跡から出土した木製品の年代は 17 世紀中頃以降であることが推定される。

樹種同定の結果、曲物底板はスギに同定された。スギは木理が通直で割裂性が高く、加工性や耐水性が比較的高い。加工が容易なことと、耐水性があることが利用の背景に考えられる。なお、曲物底板の木取りは板目板であるが、板目材は細胞密度が高い晩材部が板状・層状に入るため、柾目板に比べて保水性が高いとされる。曲物の製作にあたり、より保水性の高い木取りで作られたことが推定される。

なお、伊東・山田（2012）のデータベースを用いて京都府内の調査事例を見ると、スギは鹿苑寺（金閣寺）庭園や長岡京左京などの古代～中世の曲物にヒノキと共に利用例が散見される。近世の試料では東洞院･曇華院跡でヒノキに確認された例があるのみで、スギは確認されていない。竹材については、観察した範囲で加工された痕跡は確認されない。樹種同定の結果、タケ亜科に同定された。外観的特徴と整合する結果である。タケ亜科は節の形状でタケ類とササ類に区別され、タケ類のマダケ属は節の形状で識別できることがある。しかし、今回の試料では節が破損しており、タケ類・ササ類の区別はできなかった。

井戸跡の年代については、本分析調査結果と材の出土位置など、現地調査の成果を併せて解析する必要がある。木材の利用については、同時代の周辺遺跡から出土する木製品についても、樹種同定を実施し、資料を蓄積することが望まれる。

引用文献

伊東隆夫・山田昌久(編),2012, 木の考古学　出土木製品用材データベース . 海青社 ,449p.

Reimer P.J., Bard E., Bayliss A., Beck J.W., Blackwell P.G., Bronk Ramsey C., Buck C.E., Cheng H., Edwards R.L., Friedrich M., Grootes P.M., Guilderson T.P., Haflidason H., Hajdas I., Hatté C., Heaton T.J., Hoffmann D.L., Hogg A.G., Hughen K.A., Kaiser K.F., Kromer B., Manning S.W., Niu M., Reimer R.W., Richards DA., Scott E.M., Southon J.R., Staff R.A., Turney C.S.M., van der Plicht J., 2013, IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves 0–50,000 years cal BP. Radiocarbon, 55, 1869–1887.

Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.（編）,2006, 針葉樹材の識別　IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト . 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部　久・内海泰弘（日本語版監修）, 海青社 ,70p.［Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.（2004）*IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification*］.

島地　謙・伊東隆夫 ,1982, 図説木材組織 . 地球社 ,176p.

Stuiver M. & Polach A.H., 1977, Radiocarbon 1977 Discussion Reporting of 14C Data. Radiocarbon, 19, 355-363.

(3) 西加舎遺跡第 4 次発掘調査（平成 28 年度）

1　はじめに

西加舎遺跡では、これまで 3 次（平成 10 年度・11 年度・25 年度）にわたって、範囲確認調査を実施している。第 1 次・第 2 次調査は当時、府営ほ場整備事業として計画されたことに伴って実施し、第3次調査は当該農地再編整備事業に伴って実施したもので、今回は第4次調査にあたる。現地調査は平成 29 年 3 月 23 日に実施した。調査は 3m × 3m の小規模な本調査を当初 36 箇所において計画したが、先行して実施した東加舎遺跡第 3 次発掘調査との関係で協議した結果、2 箇所の調査にとどめ、残りの調査地については次年度以降に実施することとした。

調査にあたっては土地所有者の方々をはじめ、本梅町国営ほ場整備推進協議会には多大な御協力、御理解をいただいた。心より感謝したい。

2　調査概要

今回の調査地は本梅町西加舎西関田を対象とし、当遺跡の南端にあたる。調査地近辺では、平成 11 年度の調査（第 2 次）において、耕作土直下の黄褐色土面で、埋土が淡黒灰色砂質土の土坑の一部と考えられる遺構を検出し、また平成 25 年度では表土上面から深さ 30 ～ 50cm の黄褐色土面で、埋土が黒褐色土の土坑の一部（2 箇所）及び溝状の遺構の一部と考えられる遺構を検出している。しかし、調査の性格上、遺構の性格・規模等は明らかではないが、時期については遺構埋土から、古墳時代以前のものと推測される。

今回は、西加舎遺跡において、これまで遺構を検出している地点の周辺を対象として調査を実施した。調査は工事実施計画に基づき、切土施行等によりやむを得ず影響を受ける部分を対象とし、3m × 3m の小規模な本調査を 2 箇所において実施した。

調査は小型重機で耕作土及び床土を除去後、基盤土を徐々に掘削し、人力で精査を行った。調査成果は下表のとおりであるが、拳大から人頭大の礫を多量に含む土質となり、安定した生活面は認められず、遺構・遺物は検出されなかった。

付表2.　西加舎遺跡第4次発掘調査　調査概要

調査地番号	調　　査　　概　　要
1	耕作土〔20cm〕～灰色粘質土〔3cm〕～灰褐色粘質土、黄褐色粘質土混（人頭大の礫含む）〔12cm〕～灰色砂質土（拳大の礫含む）
2	耕作土〔20cm〕～灰褐色砂礫土、黄褐色粘質土混〔18cm〕～黄褐色礫土（拳大の礫含む）

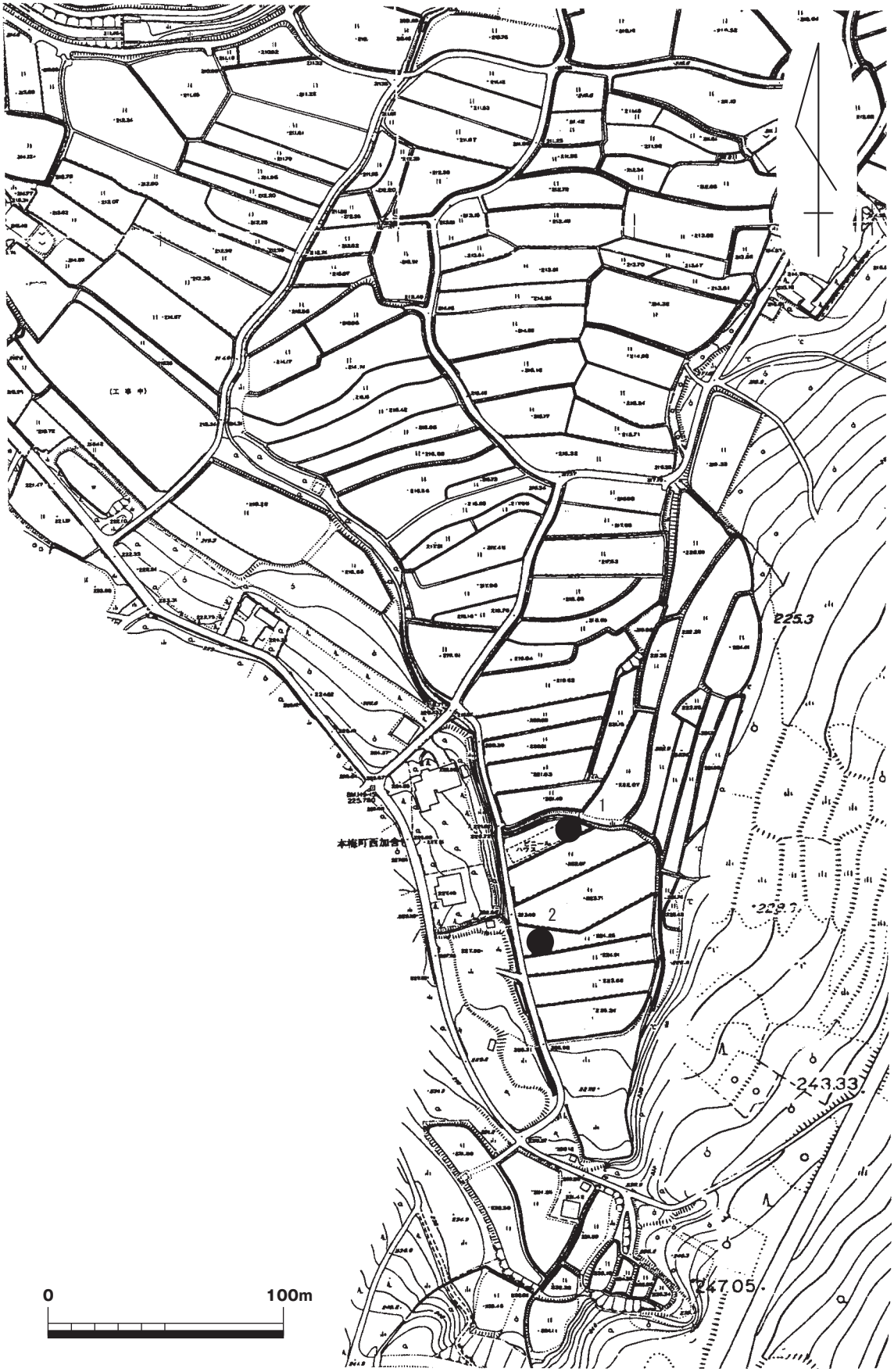
3　おわりに

今回の調査地周辺では、これまで南側で１地点、北側で３地点において遺構を検出しているが、調査を実施した２地点では遺構の広がりを確認することはできなかった。当該地は山麓や谷地形であるため急傾斜地であり、棚田景観を示し、西方の山腹には、横穴式石室を内部主体とすると考えられる径約 6m のクボラ古墳が築造されている。また、東側を通る主要地方道川西園部線は、かつて能勢街道と呼ばれ、能勢妙見山への参詣道、妙見道とも呼ばれた。

このように、当該地は交通の要衝の地であることから、今後は、さらなる調査を実施し、調査成果と現地形を検討する中で、遺構の広がりを想定していく必要がある。

付表3.　本梅工区対象遺跡の発掘調査一覧

調査年度	遺　　跡　　名	調査主体
平成 10 年度	井手遺跡（第１次）・西加舎遺跡（第１次）	亀岡市教育委員会
平成 11 年度	東加舎遺跡（第１次）・西加舎遺跡（第２次）	亀岡市教育委員会
平成 25 年度	井手遺跡（第２次）・東加舎遺跡（第２次） 西加舎遺跡（第３次）	亀岡市教育委員会
平成 27 年度	井手遺跡（第３次）	亀岡市教育委員会
平成 28 年度	東加舎遺跡（第３次）・西加舎遺跡（第４次）	亀岡市教育委員会
平成 29 年度	井手遺跡（第４次）	亀岡市教育委員会



第 20 図　調査地配置図（1/2,500）

(4)　井手遺跡第４次発掘調査（平成 29 年度）

1　はじめに

井手遺跡では、これまで３次にわたる範囲確認調査を実施している（付表３参照）。第１次・第２次調査は当時、府営ほ場整備事業として計画されたことに伴って実施し、第３次調査は当該農地再編整備事業に伴って実施したもので、今回は第４次調査にあたる。

本調査は、これまでの３次にわたる調査成果と工事実施計画に基づき、遺構が滅失する恐れがあるほ場を対象として、トレンチ１箇所・約 900㎡で実施した。

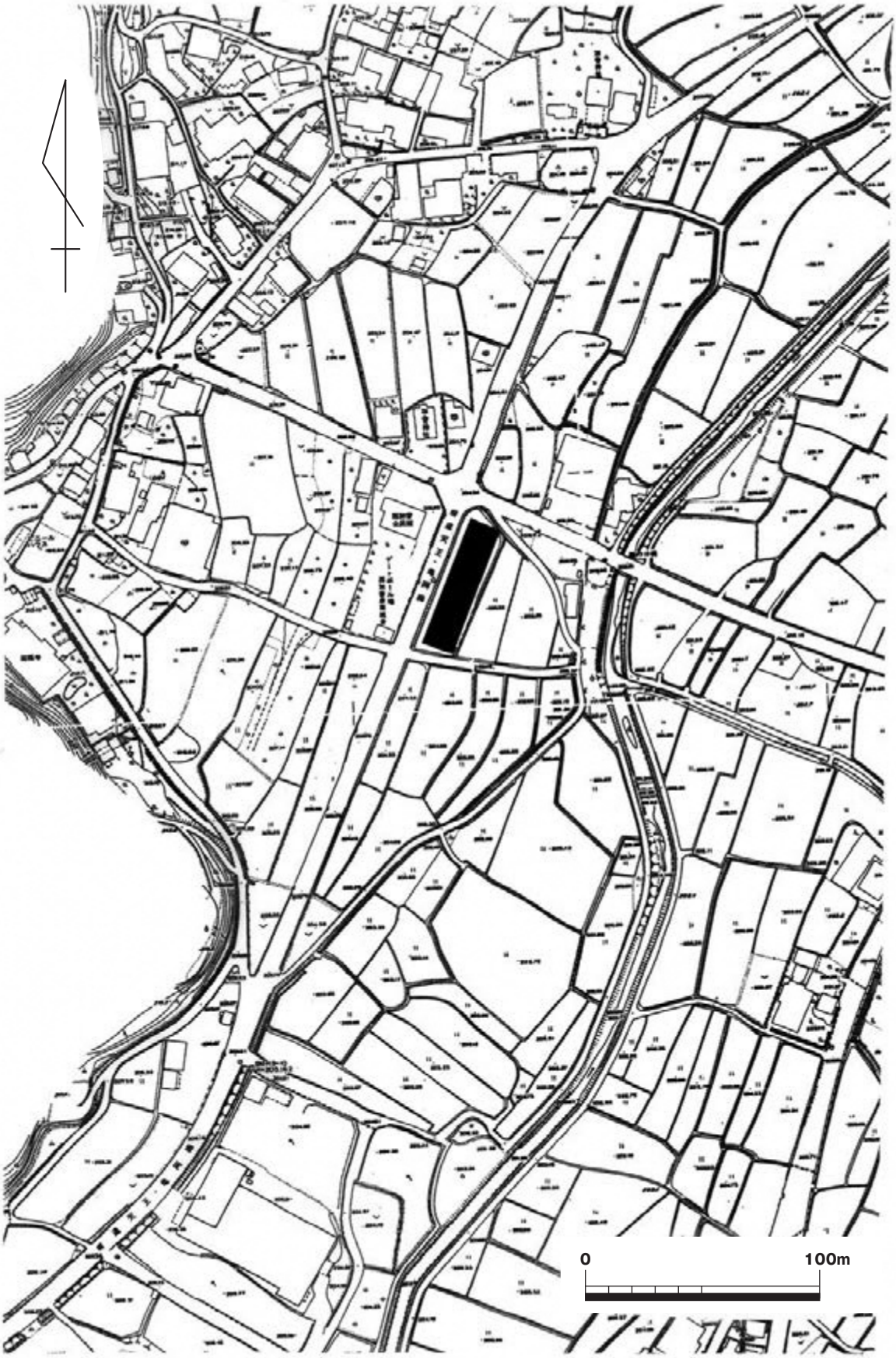
2　調査概要

現地調査では平成 29 年 11 月９日（木）より重機掘削を開始し、11 月 16 日（木）より作業員を動員して人力での掘削を開始した。調査成果に基づいて順次調査地の拡張を進め、当初 200㎡でスタートしたものの、最終的には 900㎡の調査となった。一定の成果が得られたことから平成 30 年２月 17 日（土）に現地説明会を開催し、30 名が来場した。調査は同３月２日（金）に終了し、３月７日（水）に事務所等の撤去も完了した。

調査成果としては、中世の掘立柱建物跡、柱穴跡群、土坑等と近世以降の暗渠を検出した。掘立柱建物跡の柱穴跡の一部からは、12 世紀初頭～前半の瓦器椀や土師器椀の破片が出土したほか、地盤沈下を防ぐために置かれたと思われる礎盤石を検出した。

3　おわりに

出土遺物等から、本調査で検出した遺構は 12 世紀初頭～前半の集落跡と評価される。文献史料では、12 世紀前半に当地域に藤原忠通娘の皇嘉門院領である賀舎荘が存在していたことが確認されており、集落跡と賀舎荘との関連性が注目される。現在調査継続中であり、調査成果の詳細については、次年度に報告することとする。



第 21 図　調査地位置図（1/2,500）

2　亀山城跡７次発掘調査報告書

1　はじめに

亀山城跡では付表４のとおりこれまで６次にわたる発掘調査が実施されている。

第１次調査では、亀岡高校敷地内西南隅で調査を実施し、東西にのびる溝跡１条が検出され、溝内から青磁片や灰釉皿片、軒丸瓦などが出土した。報告者は外堀の可能性を指摘している。

第２次調査では、古墳時代の竪穴住居跡や掘立柱建物跡、土坑、溝跡、奈良時代の掘立柱建物跡と柵列、江戸時代の溝跡と土坑跡を検出した。

第４次調査では、溝跡や土坑、柵列などが検出されたが、報告者は寛政５年（1493）の「山陰丹府桑田亀山図」を参照し溝跡や柵列が武家屋敷地跡に関わるものであること、また武家屋敷の外堀側には塀・犬走り・水路・道路が存在し、土塁・外堀と続くことを指摘している。

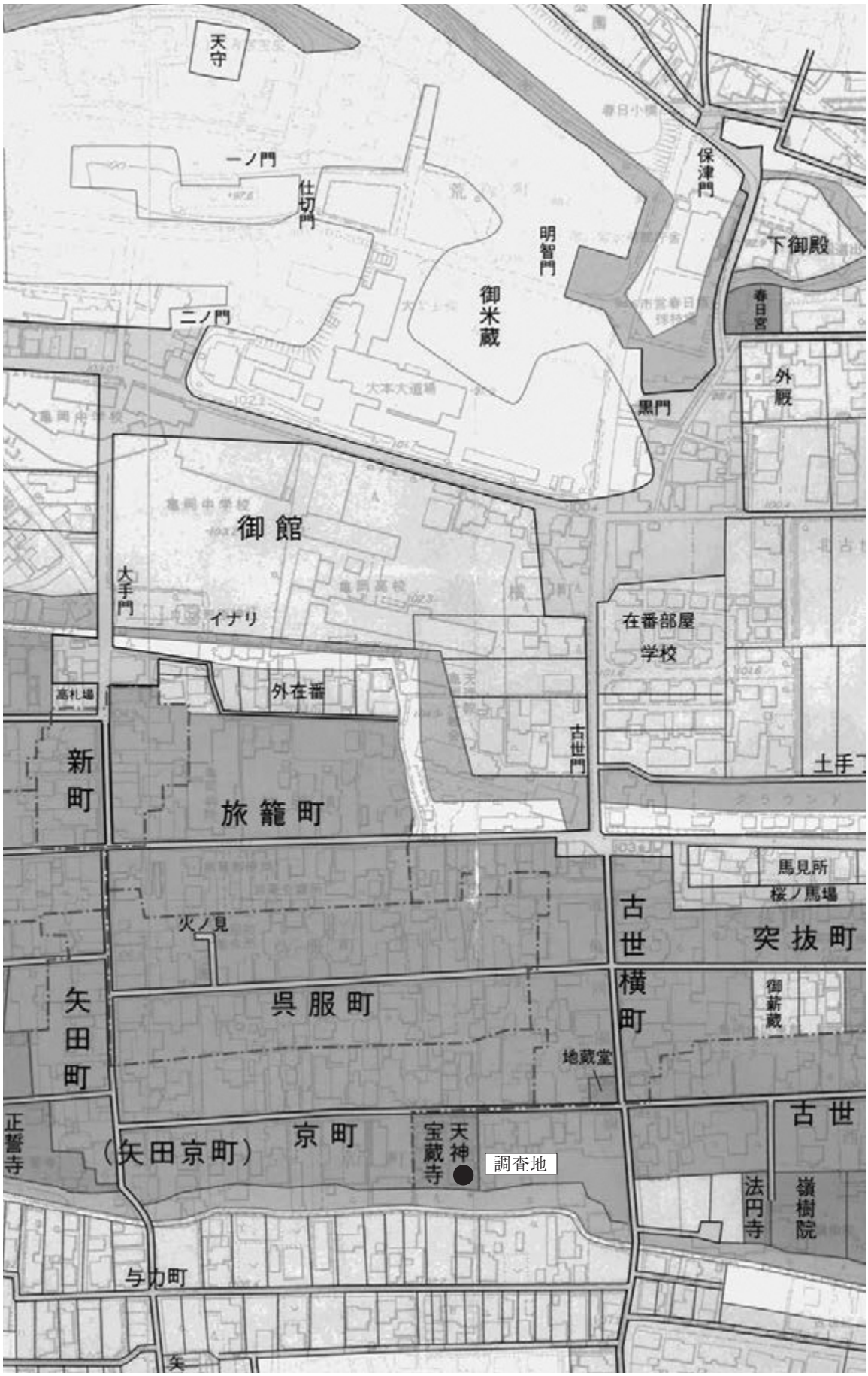
第５次調査では、溝跡や土坑が検出された。第６次調査は、外堀直上に当たる部分でのグリッド調査であったが、遺物や遺構は特に検出されなかった。

付表4.　亀山城跡発掘調査一覧

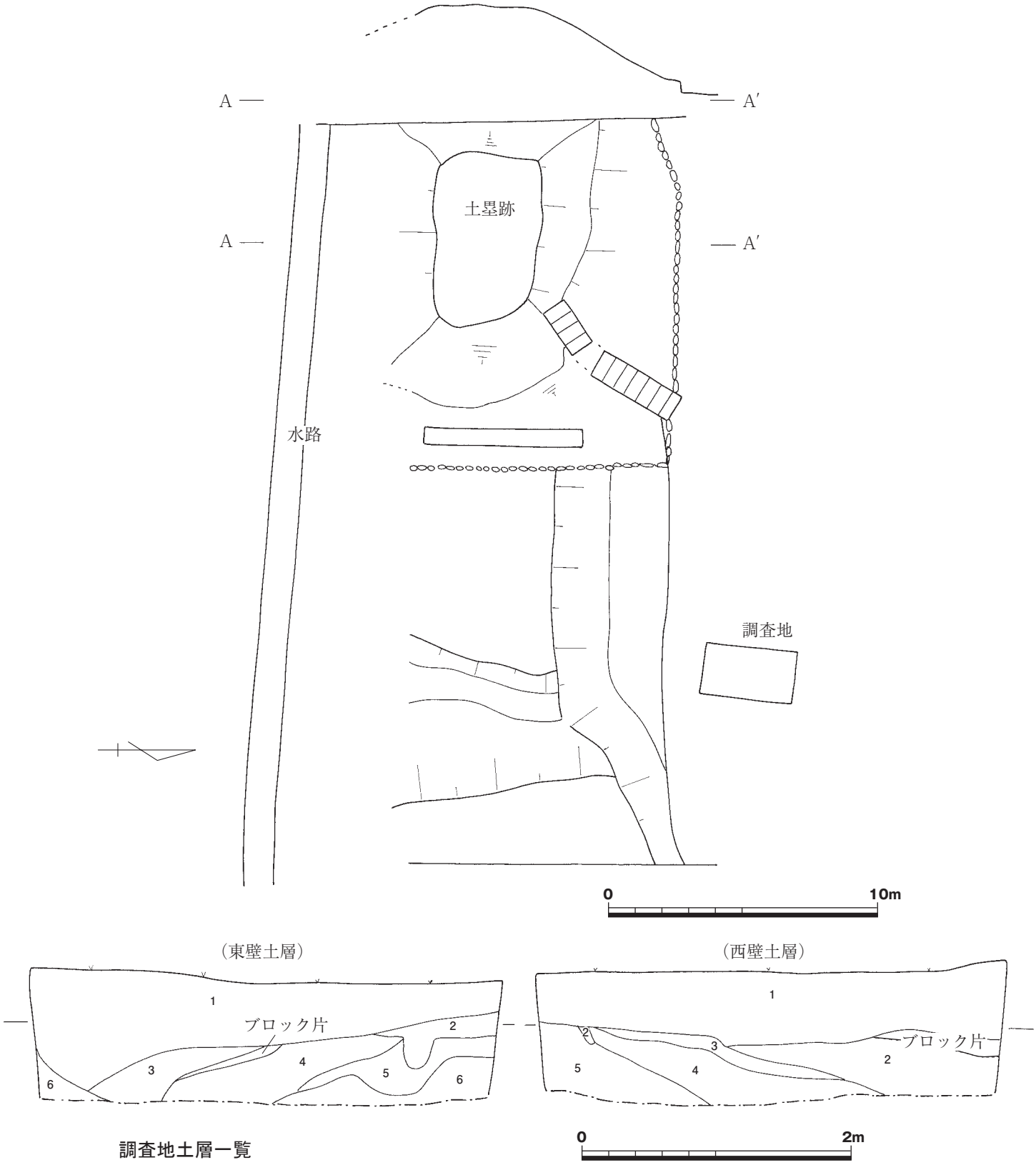
年度	次数	調査機関	原因	検出遺構	文献
昭 58	1	府埋セ	範囲確認調査	溝跡	府遺概第７冊
昭 63	2	府埋セ	範囲確認調査	竪穴住居跡、掘立柱建物	府遺概第 27 冊
平５	3	市教委	－	－	なし
平６	4	府埋セ	範囲確認調査	溝跡、土坑、柵列	府埋概第 66 冊
平 13	5	市教委	ケアハウス建設	溝跡、土坑、柱穴	亀市報第 61 集
平 28	6	市教委	集合住宅建設	グリッド調査	なし
平 28	7	市教委	範囲確認調査	グリッド調査	本報告

以上のように、これまでの亀山城跡における発掘調査はおもに外堀より内側の武家屋敷地で実施されてきたのであるが、第７次調査ははじめて惣構にかかる部分で実施した。それゆえ、惣構跡については基づく考古学の調査成果はないが、文献史料では、天正５年に「惣堀」の普請が確認される。当時の惣構の規模は不明であるが、正保元年に作成が命じられた正保城絵図には土塁の横幅が６～８間で高さが２間、惣堀の横幅が３～５間で深さが２尺～１間半と記され、当初の様相がうかがえる。ただし寛永 20 年に亀山藩主菅沼定芳が亡くなった際には、宗堅寺境内の土塁が削平されて墓石が建立されており、17 世紀初頭にはすでに惣構の本来的な機能は失われていたと考えられる。また藤井松平氏の時代明暦元年（1655）年に、「堀さらへ」に伴って作成された城絵図には、「此方土手高サ壱間半から弐間迄」「土手壱間」、「竹藪有り」などと記され、正保年間に比べて土塁が荒廃しているようすがうかがえる。

調査地は天満神社の境内地に当たるが、この神社は、複数の絵図資料から 17 世紀前半より江



第 22 図　調査地位置図
（「丹波亀山城下町復原図」『新修亀岡市史資料編第 2 巻』）



調査地土層一覧

1. 10YR3/1　黒褐色砂質土　瓦片混じる　【表土】
2. 5Y3/2　オリーブ黒色砂質土
3. 10YR2/2　黒褐色粘質土
4. 2.5Y3/3　暗オリーブ褐色砂質土　れき・河原石 20% ほど混じる
5. 10YR3/4　暗褐色粘質土　しまりあり
6. 10YR4/6　褐色砂質土　こぶし大のれき含む【地山カ】

第 23 図　調査地平面図・土層断面図

戸時代を通じて当地に存在していたことが確認できる。現存本殿は青山氏の家紋の入った鬼瓦を載き、境内地には18～19世紀の石灯篭が複数残存していることから、亀山藩主や住民の信仰の対象となってきたことがうかがえる。

本調査は、平成29年4月に境内地にて天満神社の旧社務所が取り壊され、隣接する自治会会議所の建築工事が予定されていることが判明し、南面する惣構跡の破壊が危惧されたために、惣構跡の範囲確認の目的で惣構跡に南接する部分で実施したものである。

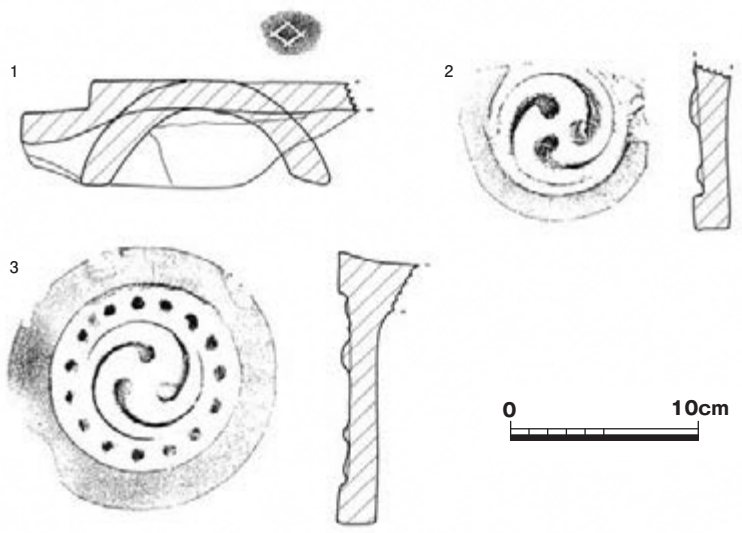
2　調査経過

5月1日（月）に現地にて施工業者・地権者と協議を実施したうえで調査地を東西2m × 4mと決定し、5月8日（月）より発掘調査を実施した。表土掘削を重機で行った後人力で精査をし、地山の上面で掘削を止めた。作業は8日中に完了した。平面図と土層断面図を記録して調査完了とし、当日中に重機によって埋戻しを行なった。

3　調査概要

第1層は、約40～90cmの盛土がなされて現在の地表面を形成している。表土は旧社務所取り壊しに伴って撹乱を受けていたが、第1層の土中から瓦片が検出された。

第2層以下では、3つの平坦面が確認された。1つめは第2層が形成する平坦面であるが、西壁断面でしか確認できない。2つめは、第5層が形成する平坦面で、東壁断面では柱穴状の遺構も確認できる。第4層と第3層もこれに連なるように見えるが、土にはしまりがなく、第3層には河原石も含まれることから、川の氾濫等による堆積土ではないかと思われる。3つめは第6層が形成する平坦面で、東壁断面南側で確認でき、中央から北側にかけての大きな落ち込みと、南側でちいさな溝上の落ち込みが確認できる。



第24図　出土遺物実測図（1/4）

4　出土遺物

本調査で、遺物が検出されたのは第１層のみである。ここでは、第１層の撹乱部を除く土中で検出された瓦片のうち、刻印や瓦当が認められたものを報告する。

１は丸瓦で、側面に菱形の刻印が認められた。この刻印は亀山城下紺屋町在住の瓦師である花野氏の関与を示すものである。

２・３は軒丸瓦である。瓦当文様はともに右巴の三巴文であるが、２のほうが巴文の先端がやや短く、３よりも時期が上る可能性がある。

5　おわりに

今回の調査では、狭小な調査地ではあるが、少なくとも３期にわたる土地造成のようすが検出された。遺物が検出された土層は第１層のみで、他の土層からは遺物が検出されなかったためそれぞれの時期を明らかにすることができない。第４次調査では、外堀に面する土塁の内側に（屋敷地側から）塀・犬走り・水路・道路の存在が想定されているが、東壁断面南側で見られる第６層による平坦面と落ち込み、あるいは第５層の平坦面と柱穴上の遺構のいずれかは、これに当たるのかもしれない。

しかしながら、今回の成果だけで遺構の性格を判断できるものではなく、今後の発掘調査等の成果を蓄積していくことが必要である。調査成果の蓄積によって、丹波亀山城や城下町の形成過程やその姿を少しずつ復元していきたい。

3　千代川遺跡第 32 次発掘調査報告書

1　はじめに

亀岡市千代川町千原大門地内において、個人住宅の建て替えに際し、発掘調査を実施した。調査地は重要遺跡である千代川遺跡の北部にあたる（p3 第 1 図参照）。調査地南側は広大な農地が広がり、国営農地緊急再編整備事業「亀岡中部地区」の計画地である。

現地調査は平成 29 年 12 月 7 日に行い、調査面積は 9㎡である。

2　調査概要

調査は小型重機によって表土を除去したのち、基盤土を徐々に掘削し、精査を行った。

表土（6cm）下は褐灰色粘質土（6cm）、褐色砂質土（6cm）となり、旧耕作土･旧床土と思われ、屋敷地になる前は耕作地であったと思われる。その下層は暗褐色砂質土（20cm）、暗褐色粘質土（12cm 以上）となった。精査の結果、遺構は検出されず、暗褐色粘質土内からは土器細片が出土したのみである。

3　おわりに

今回の調査では遺構面は確認されなかった。これまでの調査においても、各微高地を区切る谷状地形、また微高地上においても幾筋もの谷状地形が認められており、今回の調査地点も、暗褐色砂質土・暗褐色粘質土の堆積状況から、谷状地形にあたるものと思われる。

さらに調査面積は狭小ではあるが、耕作に伴う素掘り溝等も検出されず、耕作地化は遅かったものと推測される。

第 25 図　調査地位置図（1/2,500）

平成 28 年度　亀岡市内詳細分布調査、試掘・確認調査等報告

亀岡市教育委員会では、埋蔵文化財包蔵地における開発事業等に伴い、各事業主体者の協力を得ながら、詳細分布調査、試掘・確認調査を実施している。

平成 28 年度において、亀岡市教育委員会では下表に示す通り、総数 83 件の詳細分布調査と試掘・確認調査を実施した。以下主要なものの概略を述べる。

14. 南金岐遺跡は、農業倉庫建設に伴う発掘調査である。約 9㎡を調査したところ、地表面より約 680mm 掘削したところで遺物細片の混じる包含層が検出された。

72. 南条遺跡は、宅地造成工事に伴なう発掘調査である。竜ケ尾山北西麓で約 15㎡を調査したが、遺構・遺物は検出されなかった。

78. 保津遺跡は、市道の南北延伸に伴う範囲確認調査である。約 9㎡の調査区 2 か所を設定して調査を実施したが、北谷川旧流路にかかわると思われる河原石の堆積層を検出したものの、遺構・遺物は検出されなかった。

平成 28 年度　詳細分布調査、試掘・確認調査等一覧表

	遺跡名称	遺跡の種類	調査実施日	所在地	概要	調査原因	備考
1	穴川遺跡	集落跡	平成28年5月13日	亀岡市吉川町穴川深田１番、２番２	顕著な遺構・遺物なし	個人住宅建設	
2			平成29年2月7日	亀岡市吉川町町田30番	顕著な遺構・遺物なし	個人住宅建設	
3	余部遺跡	集落跡	平成28年5月17日	亀岡市余部町天神又15番1、17番4、樋又54番11	顕著な遺構・遺物なし	店舗建設	
4			平成28年7月11日	亀岡市大井町並河検見ヶ上24-5	顕著な遺構・遺物なし	電気通信交換所建設	
5	池尻遺跡	集落・官衙跡	平成28年11月25日	亀岡市馬路町池尻15番2の一部	顕著な遺構・遺物なし	個人住宅建設	
6	池尻遺跡 時塚遺跡	集落・官衙跡 その他墓	平成28年6月24日	亀岡市馬路町前ノ側54番1	顕著な遺構・遺物なし	個人住宅建設	
7	馬路遺跡	集落跡 その他墓	平成28年8月26日	亀岡市馬路町釣走田２番1、2010番、2011番、2012番	顕著な遺構・遺物なし	個人住宅建設	
8			平成28年10月12日	亀岡市馬路町橋本23番	顕著な遺構・遺物なし	農業倉庫建設	試掘・確認
9			平成28年11月7日	亀岡市馬路町橋本８番１	顕著な遺構・遺物なし	個人住宅建設	
10			平成28年11月25日	亀岡市馬路町橋本23番５	顕著な遺構・遺物なし	個人住宅建設	
11	馬路遺跡 馬路館跡	集落跡 その他墓 城館	平成28年11月25日	亀岡市馬路町市場30	顕著な遺構・遺物なし	個人住宅建設	
12	太田遺跡	集落跡	平成28年4月18日	亀岡市稗田野町太田油田11-2	顕著な遺構・遺物なし	個人住宅兼工場又は店舗建設	
13	太田遺跡 南金岐遺跡	集落跡	平成29年1月12日	亀岡市大井町南部土地区画整理地区５街区１－１画地	顕著な遺構・遺物なし	工場建設	試掘・確認
14	南金岐遺跡	集落跡	平成28年12月6日	亀岡市大井町南金岐清水5番地	顕著な遺構・遺物なし	農業倉庫建設	試掘・確認
15	亀山城跡	城館	平成28年4月20日	亀岡市京町35、36	顕著な遺構・遺物なし	個人住宅建設	
16			平成28年4月27日	亀岡市西町68番4	顕著な遺構・遺物なし	個人住宅建設	
17			平成28年6月28日	亀岡市三宅町90－１	顕著な遺構・遺物なし	集合住宅建設	試掘・確認
18			平成28年7月14日	亀岡市突抜町43番3	顕著な遺構・遺物なし	保育所園舎建設	試掘・確認
19			平成28年8月3日	亀岡市三宅町52	顕著な遺構・遺物なし	個人住宅建設	
20			平成28年8月17日	亀岡市本町35-1	顕著な遺構・遺物なし	個人住宅建設	
21			平成28年8月22日	亀岡市下矢田町三丁目68	顕著な遺構・遺物なし	集合住宅建設	
22			平成28年12月20日	亀岡市柳町14-3	顕著な遺構・遺物なし	個人住宅建設	
23			平成29年1月31日	亀岡市西町29番	顕著な遺構・遺物なし	個人住宅建設	
24	観音芝遺跡	集落跡	平成29年2月10日	亀岡市篠町見晴四丁目３番５	顕著な遺構・遺物なし	個人住宅建設	
25	蔵垣内遺跡	集落跡	平成28年9月13日	亀岡市千歳町毘沙門向畑24-2	顕著な遺構・遺物なし	個人住宅建設	
26			平成29年3月10日	亀岡市千歳町毘沙門向畑3	顕著な遺構・遺物なし	個人住宅建設	
27	佐伯遺跡	集落跡	平成28年10月28日	亀岡市稗田野町佐伯西ノ辻54番、53番3の一部	顕著な遺構・遺物なし	個人住宅建設	
28			平成28年11月15日	亀岡市稗田野町佐伯　地内	顕著な遺構・遺物なし	道路改良	
29	篠遺跡	集落跡	平成28年7月21日	亀岡市篠町篠八幡裏40番5	顕著な遺構・遺物なし	個人住宅建設	
30			平成28年9月20日	亀岡市篠町篠上西裏41-1、42-2、42-3、市有地	顕著な遺構・遺物なし	宅地造成	
31			平成28年9月27日	亀岡市篠町馬堀広道3-32、3-36	顕著な遺構・遺物なし	個人住宅建設	
32			平成28年10月7日	亀岡市篠町篠上中筋31の1の一部、37、38、39、40の1、47の2の一部	顕著な遺構・遺物なし	幼稚園建設	
33			平成28年11月25日	亀岡市篠町馬堀東垣内19番1	顕著な遺構・遺物なし	個人住宅建設	
34			平成29年1月20日	亀岡市篠町野条上又13番1、14番1	顕著な遺構・遺物なし	店舗建設	
35			平成29年1月23日	亀岡市篠町野条イカノ辻北70-2	顕著な遺構・遺物なし	個人住宅建設	

36	篠遺跡 観音芝遺跡	集落跡	平成28年6月24日	亀岡市篠町篠上中筋31番1の一部、31番2の一部、37番、38番、39番、40番1、47番2の一部、49番1、49番2、50・51合併2、50・51合併3、53番3、市有地	顕著な遺構・遺物なし	幼稚園建設	試掘・確認
37	篠窯業生産遺跡群	生産遺跡	平成28年4月5日	亀岡市東つつじヶ丘曙台一丁目23-105	顕著な遺構・遺物なし	個人住宅建設	
38			平成28年4月6日	亀岡市東つつじヶ丘曙台二丁目23番83の一部	顕著な遺構・遺物なし	個人住宅建設	
39			平成28年4月12日	亀岡市東つつじヶ丘曙台二丁目35-7	顕著な遺構・遺物なし	個人住宅建設	
40			平成28年6月6日	亀岡市篠町森向坂1番149	顕著な遺構・遺物なし	個人住宅建設	
41			平成28年5月9日	亀岡市東つつじヶ丘都台二丁目30番98	顕著な遺構・遺物なし	個人住宅建設	
42			平成28年5月27日	亀岡市東つつじヶ丘都台二丁目30番96	顕著な遺構・遺物なし	個人住宅建設	
43			平成28年7月11日	亀岡市東つつじヶ丘都台二丁目23-84他3筆	顕著な遺構・遺物なし	集合住宅建設	試掘・確認
44			平成28年7月19日	亀岡市東つつじヶ丘都台二丁目30番97	顕著な遺構・遺物なし	個人住宅建設	
45			平成28年7月29日	亀岡市篠町森上垣内69-2	顕著な遺構・遺物なし	個人住宅建設	
46			平成28年8月18日	亀岡市篠町夕日ヶ丘一丁目9番24	顕著な遺構・遺物なし	個人住宅建設	
47			平成28年8月29日	亀岡市篠町森上垣内61-3	顕著な遺構・遺物なし	個人住宅建設	
48			平成28年10月24日	亀岡市篠町王子堂山105の一部	顕著な遺構・遺物なし	個人住宅建設	
49			平成28年11月2日	亀岡市東つつじヶ丘都台二丁目23番83	顕著な遺構・遺物なし	個人住宅建設	
50			平成28年11月11日	亀岡市東つつじヶ丘都台二丁目30番101	顕著な遺構・遺物なし	個人住宅建設	
51			平成28年11月18日	亀岡市東つつじヶ丘曙台一丁目16番66	顕著な遺構・遺物なし	個人住宅建設	
52			平成28年11月22日	亀岡市篠町森下垣内19-4	顕著な遺構・遺物なし	個人住宅建設	
53			平成28年12月26日	亀岡市篠町夕日ヶ丘一丁目9番23	顕著な遺構・遺物なし	個人住宅建設	
54			平成28年12月26日	亀岡市篠町夕日ヶ丘一丁目9番27	顕著な遺構・遺物なし	個人住宅建設	
55			平成29年1月16日	亀岡市篠町篠下長尾62-1の一部、64-1、65-1、向谷21-1の一部	顕著な遺構・遺物なし	店舗建設	試掘・確認
56			平成29年3月30日	亀岡市東つつじヶ丘曙台一丁目16番24	顕著な遺構・遺物なし	個人住宅建設	
57	篠窯業生産遺跡群 森館跡	生産遺跡 城館	平成28年9月27日	亀岡市篠町森下垣内36-3	顕著な遺構・遺物なし	個人住宅建設	
58	浄法寺古墳群	古墳	平成28年4月28日	亀岡市西つつじヶ丘大山台一丁目15番1	顕著な遺構・遺物なし	個人住宅建設	
59	浄法寺城跡	城館	平成28年10月26日	亀岡市南つつじヶ丘大葉台1丁目27-5	顕著な遺構・遺物なし	個人住宅建設	
60	高野林城跡	城館	平成28年8月4日	亀岡市千代川町高野林西ノ畑3番17、小林北ン田13番1	顕著な遺構・遺物なし	個人住宅建設	
61			平成28年9月5日	亀岡市千代川町高野林北ン田1番50	顕著な遺構・遺物なし	個人住宅建設	
62			平成28年11月17日	亀岡市千代川町高野林高ノ畑47番地の一部	顕著な遺構・遺物なし	個人住宅建設	
63			平成28年12月20日	亀岡市千代川町高野林高ノ畑36-1	顕著な遺構・遺物なし	個人住宅建設	
64	千代川遺跡	集落跡	平成28年6月24日	亀岡市千代川町小林西芝84-7	顕著な遺構・遺物なし	個人住宅建設	
65			平成28年8月1日	亀岡市千代川町小林西芝81-1の一部、82-1の一部、88-1の一部、126の一部	顕著な遺構・遺物なし	寄宿舎建設	試掘・確認
66			平成28年8月9日	亀岡市千代川町小林西芝79番8	顕著な遺構・遺物なし	個人住宅建設	
67			平成28年8月22日	亀岡市千代川町小林西芝79番7	顕著な遺構・遺物なし	個人住宅建設	
68			平成28年11月7日	亀岡市千代川町千原学堂1番、4番1合併、4番	顕著な遺構・遺物なし	個人住宅建設	
69			平成29年1月20日	亀岡市千代川町小林西芝84番1	顕著な遺構・遺物なし	個人住宅建設	
70	つつじヶ丘古墳	古墳	平成29年3月28日	亀岡市西つつじヶ丘雲仙台一丁目98番7	顕著な遺構・遺物なし	個人住宅建設	
71	並河城跡	城館	平成28年10月20日	亀岡市大井町並河一丁目22-1の一部、22-2	顕著な遺構・遺物なし	個人住宅建設	
72	南条遺跡	散布地	平成28年11月24日	亀岡市曽我部町南条向山29-2の一部	顕著な遺構・遺物なし	宅地造成	試掘・確認
73	南条遺跡 南条古墳群 南条古墓群	散布地 古墳 その他墓	平成28年7月22日	亀岡市曽我部町南条大谷1番14、南条五郎谷1番16	顕著な遺構・遺物なし	集合住宅建設	試掘・確認
74	馬場ヶ崎遺跡 馬場ヶ崎古墳群	集落跡 古墳	平成28年10月3日	亀岡市大井町小金岐一丁目12-11	顕著な遺構・遺物なし	個人住宅建設	
75	平松遺跡	散布地	平成29年2月17日	亀岡市本梅町平松八百分　地内	顕著な遺構・遺物なし	工場地造成	
76	法貴館跡	城館	平成29年2月3日	亀岡市曽我部町法貴茶屋下又11番	顕著な遺構・遺物なし	個人住宅建設	
77	保津遺跡	散布地	平成28年7月22日	亀岡市保津町五番81番2	顕著な遺構・遺物なし	個人住宅建設	
78			平成29年1月13日	亀岡市保津町子守　地内	顕著な遺構・遺物なし	道路延伸	試掘・確認
79	矢田遺跡	散布地	平成28年5月6日	亀岡市下矢田町四丁目103-9	顕著な遺構・遺物なし	個人住宅建設	
80			平成28年7月8日	亀岡市下矢田町三丁目115-1	顕著な遺構・遺物なし	個人住宅建設	
81	山本遺跡	散布地	平成28年5月27日	亀岡市山本北条19の一部	顕著な遺構・遺物なし	個人住宅建設	
82	與能遺跡	集落跡	平成28年11月21日	亀岡市曽我部町寺23-1	顕著な遺構・遺物なし	個人住宅建設	
83			平成28年11月21日	亀岡市曽我部町寺長縄手23-1、23-2、24	顕著な遺構・遺物なし	宅地造成	

※概要は、開発深土までの状況を示す。

図　版

図版第１　千代川遺跡第 30 次発掘調査

（1）　千代川遺跡全景（航空写真　北から）

（2）　千代川遺跡全景（航空写真　南から）

図版第２　千代川遺跡第 30 次発掘調査

（1）　調査地北半部　全景（北から）

（2）　調査地北半部　全景（南から）

図版第３　千代川遺跡第 30 次発掘調査

（1）　調査地北半部　溝跡全景（東から）

（2）　調査地北半部　溝跡全景（西から）

図版第４　千代川遺跡第 30 次発掘調査

（1）　調査地南半部　全景（北から）

（2）　調査地南半部　全景（南から）

図版第５　千代川遺跡第 30 次発掘調査

（1）　調査地南半部　溝跡全景（北から）

（2）　調査地南半部　溝跡全景（南から）

図版第 6　千代川遺跡第 30 次発掘調査

（1）　調査地南半部　溝跡土器出土状況

（2）　調査地南半部　溝跡土器出土状況

図版第７　千代川遺跡第 30 次発掘調査

（1）　調査地南半部　中世素掘り溝検出状況

（2）　調査地南半部　柱穴群検出状況

図版第８　東加舎遺跡第３次発掘調査

（1）　第２トレンチ　掘削状況（北西から）

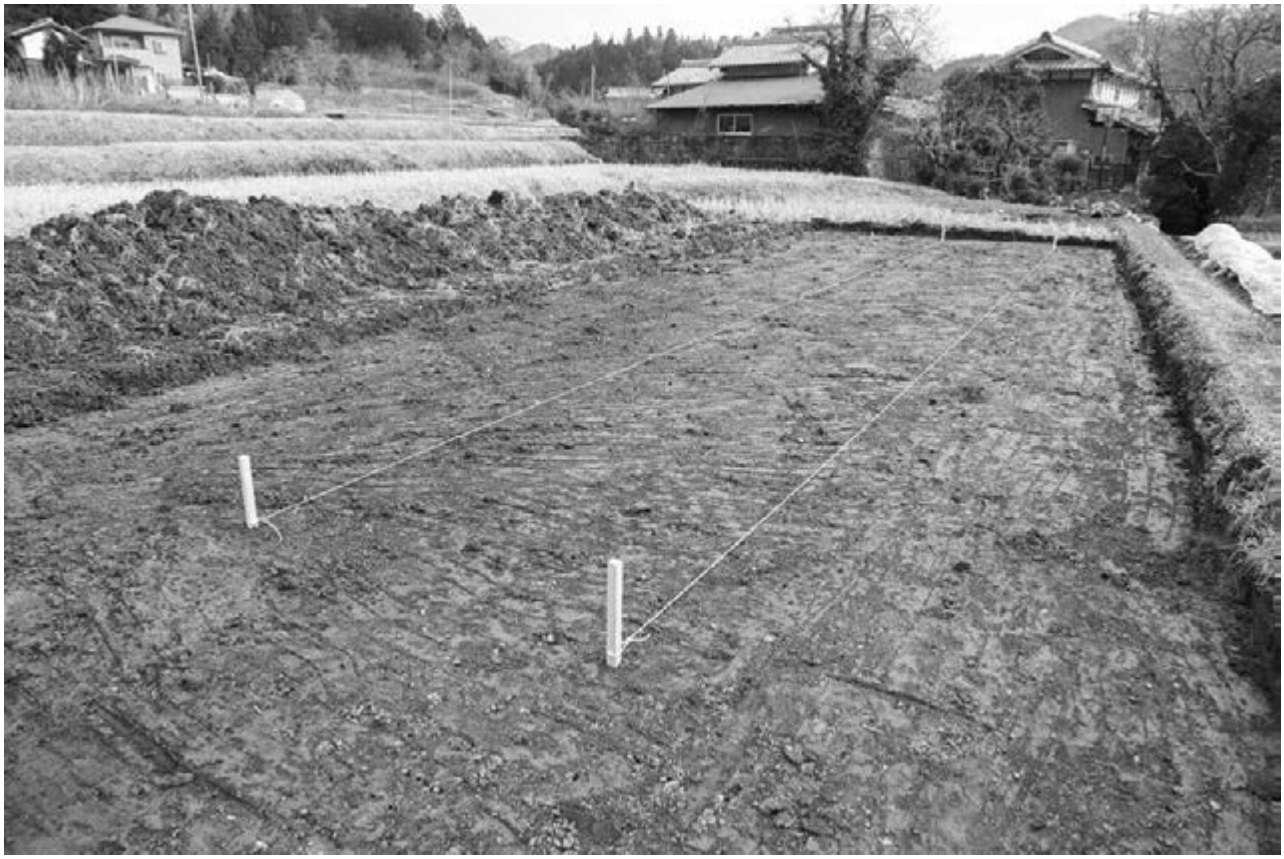
（2）　第２トレンチ　柱穴跡検出状況（北から）

図版第９　東加舎遺跡第３次発掘調査

（1）　第２トレンチ　東側拡張部掘削状況（南東から）

（2）　第２トレンチ　掘立柱建物跡検出状況（南東から）

図版第 10　東加舎遺跡第 3 次発掘調査



(1)　第 4 トレンチ　調査地掘削状況（北西から）

(2)　第 4 トレンチ　建物跡礎石検出状況（北から）

図版第 11　東加舎遺跡第 3 次発掘調査

(1)　第 4 トレンチ　全景（南西から）

(2)　第 4 トレンチ　北側全景（南東から）

図版第 12　東加舎遺跡第 3 次発掘調査

(1)　第 4 トレンチ　中央部礎石検出状況（南東から）

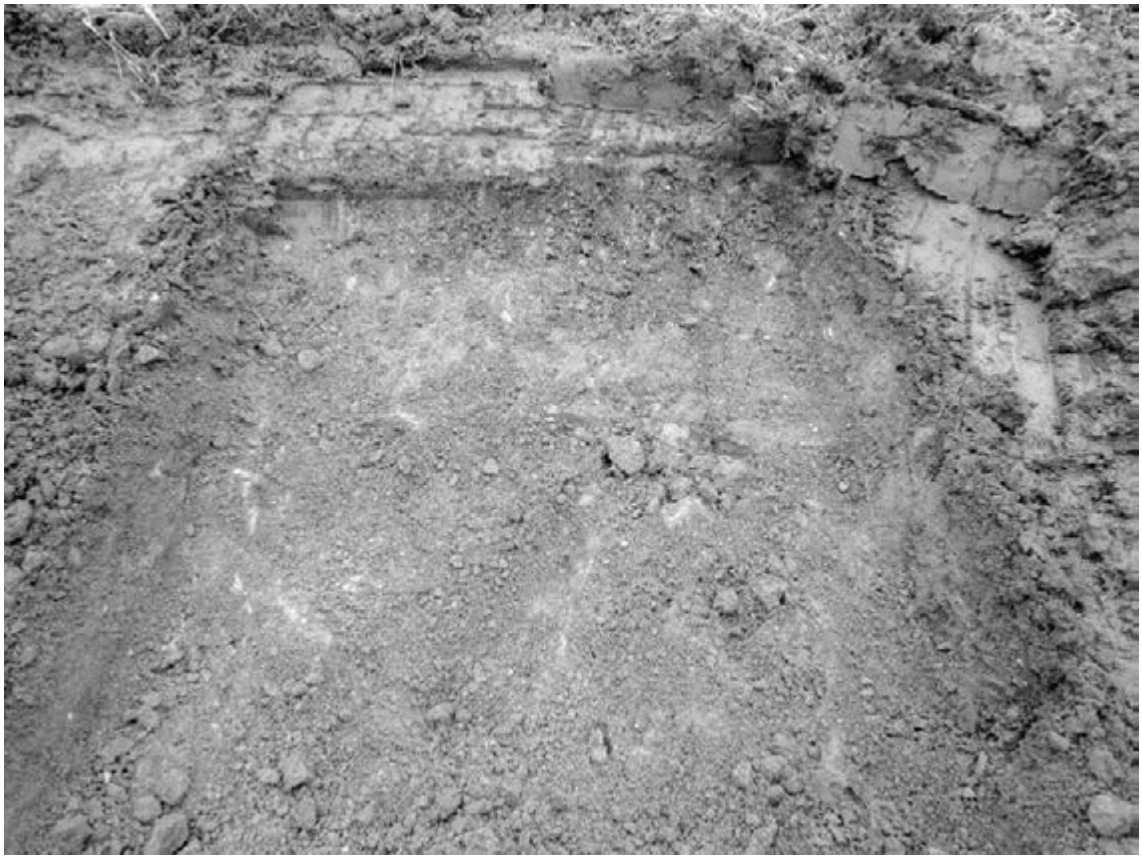
(2)　第 4 トレンチ　南側全景（南から）

図版第 13　東加舎遺跡第 3 次発掘調査

(1)　第 4 トレンチ　SE401 検出状況（南から）

(2)　第 4 トレンチ　SD402 検出状況（北から）

図版第 14　西加舎遺跡第 4 次発掘調査



（1）　調査地 1

（2）　調査地 2

図版第 15　亀山城跡第 7 次発掘調査

(1)　調査地全景（北西から）

(2)　調査地掘削状況（南から）

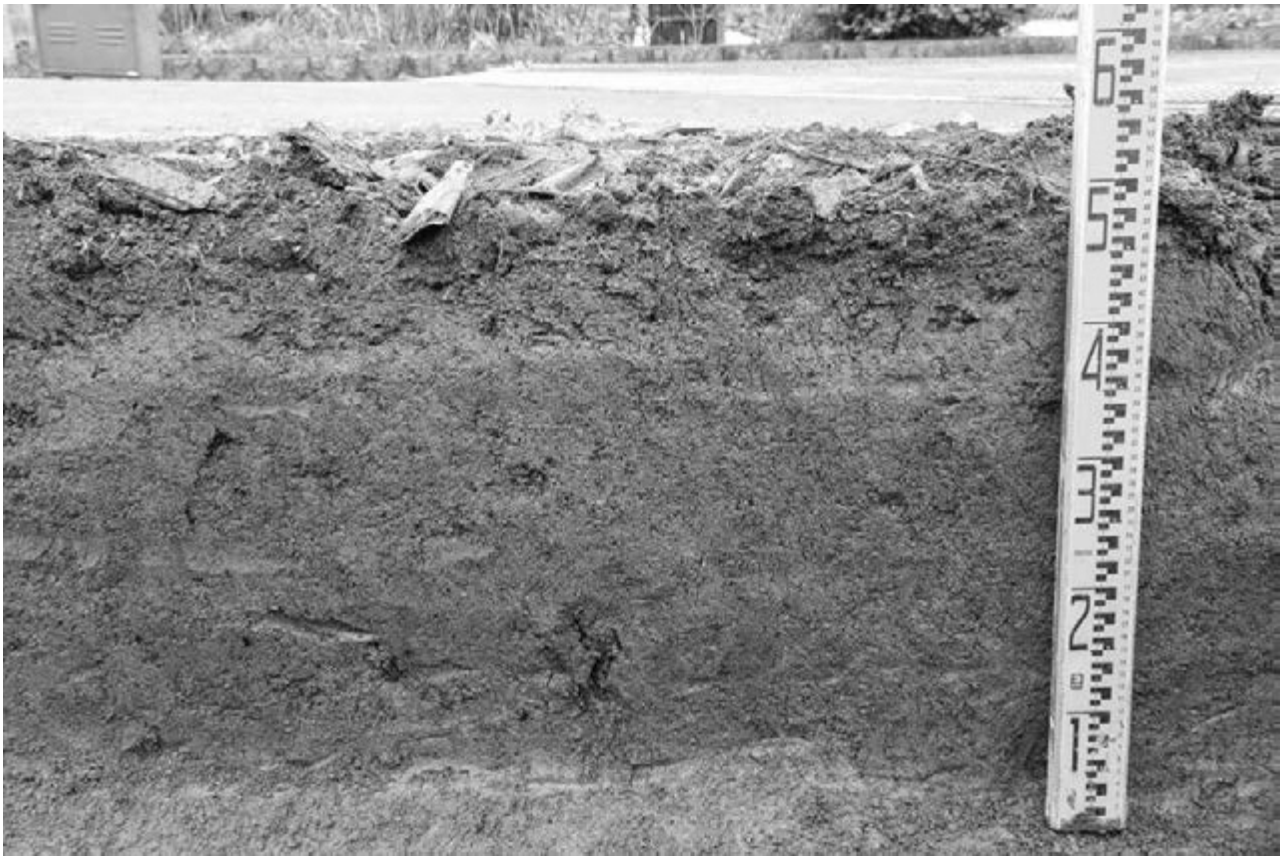
図版第 16　亀山城跡第７次発掘調査

（1）　調査地西壁断面

（2）　調査地東壁断面

図版第 17　千代川遺跡第 32 次発掘調査

(1)　調査地全景（西から）



(2)　調査地北壁断面

報　告　書　抄　録

ふりがな	しないいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書　　名	市内遺跡発掘調査報告書
副書名	国営緊急農地再編整備事業「亀岡中部地区」関係遺跡発掘調査－千代川遺跡第30次・東加舎遺跡第3次・西加舎遺跡第4次（平成28年度）・井手遺跡第4次（平成29年度）－亀山城跡第7次・千代川遺跡第32次
巻　　次	
シリーズ名	亀岡市文化財調査報告書
シリーズ番号	第95集
編著者名	中澤　勝　飛鳥井　拓
編集機関	亀岡市教育委員会
所在地	〒621－8501　京都府亀岡市安町野々神8番地　℡0771－22－3131
発行年月日	西暦　2018年3月31日

ふりがな	ふりがな	コード		北　緯	東　経	調　査　期　間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	番号	°　′　″	°　′　″			
千代川遺跡（ちよかわいせき）	千代川町（ちよかわちょう）	26206	22	35°　01′　02″	135°　34′　01″	160909～170131 171207	420㎡ 9㎡	農業基盤
東加舎遺跡（ひがしがやいせき）	本梅町（ほんめちょう）	26206	147	35°　00′　05″	135°　29′　15″	170222～170323	140㎡	農業基盤
西加舎遺跡（にしがやいせき）	本梅町（ほんめちょう）	26206	148	35°　00′　05″	135°　28′　45″	170323	405㎡	農業基盤
亀山城跡（かめやまじょうあと）	京町（きょうまち）	26206	123	35°　00′　24″	135°　35′　20″	170508	8㎡	範囲確認
井手遺跡（いでいせき）	本梅町（ほんめちょう）	26026	27	35°　00′　35″	135°　29′　54″	171109～180302	約920㎡	農業基盤

所収遺跡名	種　別	主な時代	主　な　遺　構	主　な　遺　物	特記事項
千代川遺跡（ちよかわいせき）	集落跡	奈良～平安	溝・柱穴・土坑	須恵器・墨書土器・瓦器	
東加舎遺跡（ひがしがやいせき）	集落跡	古墳～中世	掘立柱建物跡・井戸跡・柱穴・礎石	須恵器・軒平瓦・木製蓋	
西加舎遺跡（にしがやいせき）	集落跡	古墳～中世	なし	なし	
井手遺跡（いでいせき）	集落跡	古墳～中世	掘立柱建物跡・土坑・柱穴	土師器・瓦器	
亀山城跡（かめやまじょうあと）	平山城	中世末～近世	なし	軒丸瓦	